

古屋敷遺跡

—西内田地区県営圃場整備事業
埋蔵文化財包藏地発掘調査報告書—

1990

塩尻市教育委員会

ふる や しき
古 屋 敷 遺 跡

一 両内田地区県営園場整備事業
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 —

1990

塩尻市教育委員会

序

古屋敷遺跡は、塩尻市の北東部、高ボッチ山麓のなだらかな丘陵上に展開しており、以前より山ノ神遺跡の名称でよく知られていました。この度、長野県松本地方事務所管の県営ほ場整備事業面内田地区がこの地区に入り、遺跡の一部が破壊されることになったため、埋蔵文化財保護の立場から塩尻市教育委員会に緊急発掘調査を委託されたものであります。

発掘調査は5月中旬から7月上旬にかけて、天候にも恵まれたことから順調に行われ、その結果、数多くの成果をあげることができました。とりわけ縄文時代前期の集落跡はこの地域では極めて珍しく、貴重な資料となるとともに同地域の古代史解明に大きな前身をもたらしたものといえましょう。

終わりにあたり本調査に御理解、御協力下さいました調査員の先生方をはじめ、地元土地改良区役員の方々、また作業に歓身的に御協力いただいた地元の方々など関係各位に深甚の謝意を表すものであります。

平成2年1月

塩尻市教育委員会

教育長 小松 優一

例　　言

1. 本書は、平成元年度県営圃場整備事業両内田地区に伴う、長野県松本地方事務所と塩尻市教育委員会との契約に基づいて平成元年5月17日から7月8日にわたって発掘調査した塩尻市大字片丘南内田の古屋敷遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査経費については、松本地方事務所からの委託金および国庫・県費補助金を受けている。
3. 遺物および記録類の整理作業から報告書作成は、平成元年7月から平成2年1月にかけて行った。分担は次のとおりである。

遺構…整理、トレース；鳥羽、桜井。

遺物…洗浄、註記；中村、桜井。

土器復元；市川、一ノ瀬。

土器実測；鳥羽。

土器拓本；小林、中村、桜井、一ノ瀬。

石器実測；小林。

図版組み…鳥羽、小林。

写真…鳥羽。

4. 本書の執筆は各調査員が分担して行った。分担は次のとおりである。

第I章、第II章、第III章、第IV章……………鳥羽嘉彦

第V章、第VI章……………小林康男

5. 本書の編集は鳥羽が行った。

6. 調査にあたり長野県両内田土地改良区理事長横山儀藤多氏ならびに関係役員の各氏、および地元の方々の御理解、御援助をいただいたことを明記し、お礼としたい。

7. 本調査の出土品、諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

目 次

序		
例 言		
第 I 章	調査状況.....	1
第 1 節	発掘調査に至る経過.....	1
第 2 節	調査体制.....	2
第 3 節	調査日誌.....	2
第 4 節	遺跡の状況と面積.....	5
第 II 章	遺跡周辺の環境.....	6
第 1 節	自然環境.....	6
第 2 節	周辺遺跡.....	8
第 III 章	遺跡の概要.....	9
第 1 節	遺跡の概要.....	9
第 2 節	発掘区の設定.....	9
第 IV 章	遺構	11
第 1 節	住居址	11
第 2 節	小竪穴	15
第 V 章	遺物	41
第 VI 章	まとめ	59

第Ⅰ章 調査状況

第1節 発掘調査に至る経過

- 昭和 63 年 12 月 13 日 両内田土地改良区、市教育委員会により調査箇所についての現地協議
12 月 19 日 昭和 64 年度文化財関係補助事業計画について（提出）
平成元年 4 月 3 日 平成元年度文化財関係国庫補助事業の内定について（通知）
" 平成元年度文化財保護事業県補助金の内示について（通知）
5 月 9 日 埋蔵文化財包蔵地古屋敷遺跡発掘調査委託について（依頼）
5 月 11 日 埋蔵文化財包蔵地古屋敷遺跡発掘調査委託について（回答）
5 月 12 日 埋蔵文化財包蔵地古屋敷遺跡発掘調査委託について（契約）
5 月 16 日 埋蔵文化財包蔵地古屋敷遺跡の発掘調査について（通知）
5 月 23 日 平成元年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書について（提出）
7 月 11 日 平成元年度文化財保護事業県補助金交付申請書について（提出）
7 月 18 日 平成元年度国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付決定について（通知）
7 月 25 日 古屋敷遺跡発掘調査終了について（届）
" 古屋敷遺跡埋蔵文化財の取得について（届）
9 月 11 日 平成元年度文化財保護事業県補助金の交付決定について（通知）
10 月 12 日 古屋敷遺跡埋蔵物の文化財認定について（通知）
10 月 17 日 埋蔵文化財包蔵地古屋敷遺跡発掘調査委託契約の変更について（通知）
10 月 18 日 埋蔵文化財包蔵地古屋敷遺跡発掘調査委託契約の変更について（回答）

発掘調査実施計画書（一部のみ記載）

2. 遺跡名 古屋敷遺跡
4. 発掘調査の目的及び概要 開発事業県営圃場整備事業両内田地区に先立ち 800 m²以上を発掘調査して記録保存をはかる。遺跡における発掘作業は平成元年 7 月 25 日までに終了する。調査報告書は平成 2 年 3 月 25 日までに刊行するものとする。
5. 調査の作業日数 発掘作業 22 日 整理作業 22 日 合計 44 日
6. 調査に要する費用 発掘調査総額 5,025,000 円
文化財保護部局負担額 (27.5 %) 1,382,000 円
農政部局負担額 (72.5 %) 3,643,000 円
7. 調査報告書作成部数 300 部

第2節 調査体制

団長	小松 優一	(塩尻市教育長)
担当者	鳥羽 嘉彦	(長野県考古学会員、市教委)
調査員	小林 康男	(日本考古学協会会員、市教委)
	市川二三夫	(長野県考古学会員)
参加者	池田貴江子、小沢甲子郎、太田正子、太田 和、川上奈美江、小松幸美、小松義丸、小松静子、小松貞文、小松礼子、小松鈴子、桜井洋子、清水年男、高橋島信、高橋阿や子、高橋タケ子、手塚きくへ、中村洋子、中野やすみ、西野恭子、藤松謙一、松下おもと、山口伸司、吉江みより、青柳ふき子、百瀬咲子、百瀬英子、百瀬直美、花村栄子、青柳みさ江、古厩馨子、池田峰子、市川きぬえ、一ノ瀬文、中村ふき子。	
事務局	市教委総合文化センター所長	寺沢 隆
	" 文化教養担当課長	横山哲宣
	" 文化教養担当副主幹	大和清志
	" 平出遺跡考古博物館館長	小林康男
	" 平出遺跡考古博物館学芸員	鳥羽嘉彦
協力者	長野県内田土地改良区理事長	横山儀藤多
	長野県内田土地改良区工事委員長	村上与八郎
	長野県内田土地改良区事務長	前澤三也司
地権者	百瀬千穂、池田秀実、百瀬尚志、山本俊也。	

第3節 調査日誌

- 平成元年5月17日(水) 曇 調査区内5ヶ所に試掘坑を入れ、表土の堆積状況を調べる。
- 5月18日(木) 小雨のち曇 重機による表土除去。調査区南西隅から平均40cmの厚さで削平。南西隅は深さ80cmを越えてロームが露呈しないため、竪穴住居址の存在が推察される。昨夜からの雨で調査区中央付近の2m四方の範囲で多量の黒曜原石が地表面に露呈しており採取する。
- 5月19日(金) 曇 昨日に引き続き重機による表土除去。
- 5月20日(土)、21日(日) 定休日。
- 5月22日(月) 曇 重機による表土除去続。
- 5月23日(火) 小雨のち曇 器材搬入。ブレハブ設置。重機休み。
- 5月24日(水) 晴 本日より発掘作業開始。事務局より挨拶および発掘日程、作業方法等の説明があったのち、器材準備、テントとトイレの設置。調査区東側よりジョレンによる遠隔操作作

- 業を開始する。縄文土器、打製石斧、黒曜原石出土する。重機による表土除去作業終了する。
- 5月25日(木) 曇 昨日に引き続きショレンによる遺構検出作業。地山がかなり疊混じりのため遺構検出に困難をきたす。調査区中央に低地帯が走る。5m間隔にクイ打ちをし、グリッドを設定する。
- 5月26日(金) 雨天中止。
- 5月27日(土)、28日(日) 定休日。
- 5月29日(月) 遺構検出作業続行。3回目の削平となるが、周囲に比べ中央域がまだかなり高いため遺構検出には時間を要すると思われる。小豎穴状の黒色落ち込み数ヶ所から縄文前期土器片が多量に出土。
- 5月30日(火) 晴 北東隅の複数の落ち込み帯から縄文前期土器片多量に出土。中央東寄には小豎穴が濃密。
- 5月31日(水) 快晴 遺構検出作業続行。
- 6月1日(木) 晴 中央に住居址プランの落ち込みを検出。周囲には小規模の落ち込みが多い。南西隅の落ち込みに十字に1m幅のトレーナーを設定。掘り下げたところ北端で住居址の床面を確認。昨日に引き続き暑い一日だった。
- 6月2日(金) 晴、中央域の黒色帶に十字のベルトを残し掘り始める。B-4・5、C-5、D-5・6、H-I-12・13・14。昨日確認されたH-11に続き、H-12からも住居址の床面確認。H-13から住居址壁が検出されたため、I-13の土手をぎりぎりまで拡張する。
- 6月3日(土)、4日(日) 定休日。
- 6月5日(月) 曇 B-3・4、住居址と思われた黒色帶が複数の小豎穴の集合体であることが判明。D-5・6、黒色の落ち込みをほぼ完掘したが遺構にならず。I-11、土器、打製石斧、石鎌が出土。豎穴状になり、しかも焼土が出土しているが、まだプランが見えられない。I-13、明日、降雨が予想されるため、雨水が溜まらないように土手を削り、土壠を築く。低気圧が近づいているため風が強し、土埃に悩まされた。
- 6月6日(火) 晴 B-C-5、落ち込みははっきりしており、覆土も黒色であったが、床面等検出できず。D-7、ロームマウンド半載する。I-13、西端が一段低くなってしまっており、2軒になる可能性がある。朝、雨が残ったため作業員の集まりが悪かった。
- 6月7日(水) 晴 C-D-5・6、黒色落ち込みを完掘したが、遺構と判断する根拠がなく、結局、自然地形と断定した。C-11の円形落ち込みを第1号住居址とし、掘り下げ開始。土器片多数出土。各グリッドの遺物を取り上げる。
- 6月8日(木) 晴 第1号住居址、昨日に引き続き出土遺物が多い。I-13の住居址を第2号住居址とする。床面検出。西端に小豎穴らしき落ち込みあり。H-11の住居址を第3号住居址とする。堅い床面と東・北壁検出。調査区北半に検出された小豎穴群の掘り下げ。
- 6月9日(金) 雨 雨天中止。

- 6月 10日（土）、11日（日）定休日。
- 6月 12日（月）晴 3日間雨が降り続き地面が柔らかくなつたため、本日は全員、遺構掘下を中断し、もう一度、遺構検出作業を行う。中央付近に小豎穴が多く発見される。
- 6月 13日（火）曇 第1号住居址遺物取上、掘り下げ。第2号住居址掘り下げ、南西隅に敷石発見。第3号住居址、床面を精査したところ南側に別の床面を検出。小豎穴掘り下げ、セクション図化。
- 6月 14日（水）晴 第1号住居址遺物取上、床、壁検出。第2号住居址床面精査。第3・4号住居址床面精査。小豎穴掘り下げ、セクション図化。
- 6月 15日（木）曇 第1・2号住居址セクション図化。集石炉平面図測図。小豎穴掘り下げ。風が強い一日だった。
- 6月 16日（金）雨 雨天中止。
- 6月 17日（土）、18日（日）定休日。
- 6月 19日（月）雨 雨天中止。
- 6月 20日（火）曇 第1・2号住居址遺物取上。小豎穴掘り下げ、セクション図化。集石炉レベル入れ。
- 6月 21日（水）曇 第1号住居址ピット検出、掘り下げ。第2号住居址床面精査。小豎穴掘り下げ、セクション図化。
- 6月 22日（木）曇 第1号住居址遺物取上。第2号住居址床面精査。小豎穴掘り下げ、平面図測図。調査区全体図測図。
- 6月 23日（金）雨 雨天中止。
- 6月 24日（土）、25（日）定休日。
- 6月 26日（月）晴 第1号住居址床面精査、南側の土手を壊し、周りを拉張。第3・4・5号住居址写真撮影。小豎穴掘り下げ、セクション図化。
- 6月 27日（火）曇のち雨 第1号住居址床面精査、写真撮影。小豎穴セクション図化、平面図測図。昼、降雨のため作業を中止する。
- 6月 28日（水）雨 雨天中止。
- 6月 29日（木）晴 第2号住居址写真撮影、平面図測図。小豎穴セクション図化、掘り下げ。
- 6月 30日（金）曇のち晴 第1・5号住居址平面図測図。第5号住居址の貼床を剥がす。第3・4号住居址平面図測図、貼床部を剥がす。小豎穴掘り下げ、セクション図化。
- 7月 1日（土）、2日（日）定休日。
- 7月 3日（月）雨 雨天中止。
- 7月 4日（火）曇時々小雨 小豎穴掘り下げ、平面図測図。
- 7月 5日（水）晴 小豎穴掘り下げ、平面図測図。
- 7月 6日（木）曇 小豎穴掘り下げ、平面図測図。

- 7月7日（金）晴 小豈穴掘り下げ、平面図測図、遺物取上。全体写真撮影。器材片付。本日をもって現場における作業を終了する。
- 7月8日（土）晴 器材撤収。ブレハブ・トイレ撤収。

整理作業は、7月～1月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土品、記録類の整理、報告書の図版作成、原稿執筆作業。

遺跡名	場所	現況	種類	全体面積	事業対象面積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
古屋敷	塩尻市大字片丘 南内田	畑地	包蔵地	65,000m ²	30,000m ²	800m ²	2,000m ²	5,025,000円

第1表 発掘調査経過表

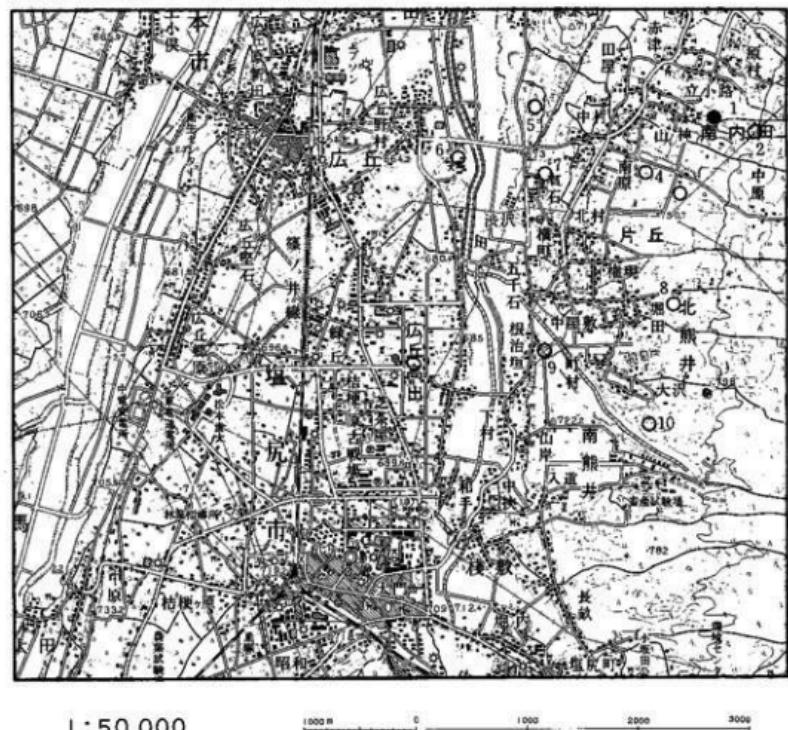
月 遺跡名	5	6	7	8～1	主な遺構	主な遺物
古屋敷	17	8		遺物整理 図面作成 原稿執筆	縄文時代前期住居址 小豈穴(縄文前期・晚期)	5 縄文時代 土器、石器 184

第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

第1節 自然環境

古里敷遺跡は塙尻市大字片丘南内田に所在し、塙尻市の東方に南北に延びる片丘丘陵上に位置する。

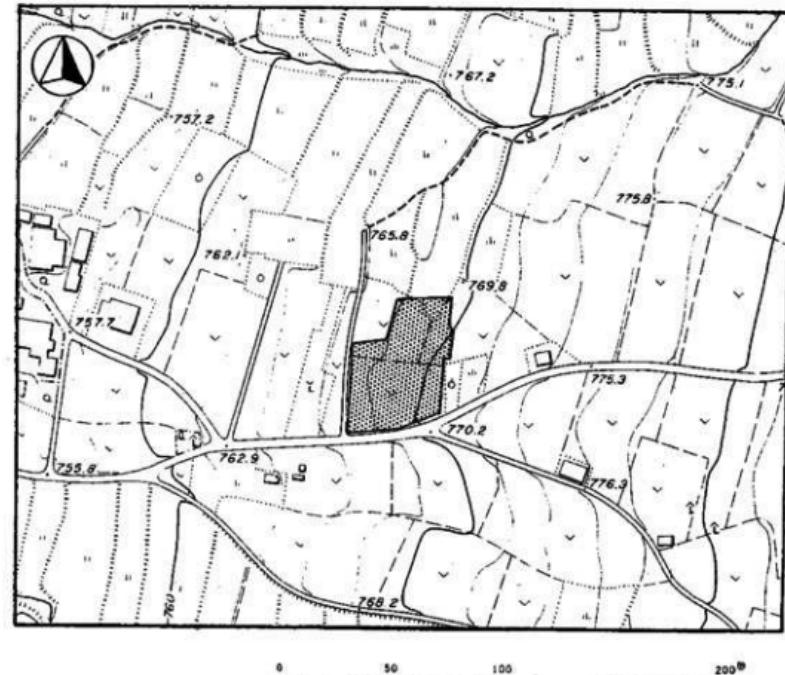
丘陵上には山麓から流下する群小の河川によって形成された複合扇状地がよく発達しており、その扇端は盆地縁辺の河岸段丘面に接している。これらの諸河川はいずれも塙尻峰に源を発し、丘陵直下を北流している田川にはば直角に流れ込んでいる。



第1図 遺跡位置図

古屋敷遺跡の立地する台地も内田の塩沢川と北熊井の小場ヶ沢川によって形成された広範囲の複合扇状地の上にあり、現在、北側を中洞川に南側を南洞川によってそれぞれ深く開析されていいるため、ちょうどテラス状の緩斜面をなしている。両河流は塩沢川扇状地と小場ヶ沢川扇状地の疊合線上の凹地をほぼ直線上に流下しており、赤城山の丘陵に浸食谷（3～10m）を形成しながら田川へと注いでいる。

南洞川を挟んで南側の台地には小丸山、内田原、無量庵、別当原などの遺跡が広く展開しており、同様な立地条件を呈する当遺跡の台地にも当然、広範囲な遺跡の存在が伺われる。以前はこの台地全体、すなわち西は現在の山ノ神集落から東は片丘山麓線付近までの東西800m、南北300mの範囲を「山ノ神遺跡」の名で総称しており、山麓線建設関連の発掘調査ではその名称を用了(1985 山ノ神遺跡 塩尻市教育委員会)。しかしその後の分布調査により、間に遺物採集の空白地帯があることを確認し、旧遺跡の西側分布域を「古屋敷遺跡」、東側分布域（既調査箇所を含む地域）を「矢口遺跡」と改名した。今回の発掘地点は標高766～770mの箇所で、前回の発掘地点とは400m西側にある。



第2図 調査地区図

第2節 周辺遺跡

本遺跡の立地する片丘丘陵には高ボッチ山麓から流下する群小の河川により形成された複合扇状地や舌状台地が発達しており、松本平でも有数の遺跡稠密地帯となっている。以下これらの遺跡について概観してみたい。

先土器時代では小丸山、山の神、向陽台で遺物が発見されている。小丸山では全長 13.7 cm の尖頭器が出土し、山の神では黒曜石片が集中して出土する箇所（ブロック）が、また向陽台ではナイフ形石器がそれぞれ出土している。

縄文時代早期には竜神平、俎原、山の神、堂の前、福沢、向陽台などの諸遺跡があり、向陽台、竜神平、堂の前では住居址が検出されている。とりわけ向陽台では押型文期の住居址 4 軒、集石炉 4 基が、また堂の前では早期末の住居址が 6 軒発見されている。

前期になると、中原、竹の花、舅屋敷、小丸山、八幡原、大林、富士塚、女夫山ノ神など多くの遺跡が発見されており、舅屋敷で 10 軒の住居址が検出された他、女夫山ノ神、竹ノ花でもそれぞれ住居址が確認されている。

中期は狐塚、渋沢、境沢、竹原、舅屋敷、富士塚、源十窪、一本杉、長者清水、菖蒲、俎原、立石、大沢、女夫山ノ神、菖蒲沢、牛亮沢、城、小丸山、二本木、君石、上木戸、山ノ神など枚挙にいとまがないほど多くの遺跡があり、特に俎原は中期のほぼ全期にわたる計 147 軒の住居址が径 40 m の中央広場を囲んで円環状に検出され、典型的な環状集落の様相を示した。

縄文後期にはいると、竜神、上木戸、舅屋敷など僅かな遺跡に激減し、次の晩期に入っても桜林、別方などで遺物の出土が認められている程度である。

弥生時代では、生活域が山麓から田川流域へ降りていく。向陽台、上木戸では後期のまとまとた集落址が発見されたほか、向陽台、君石、大原では方形周溝墓が検出され、また渋沢、花見、中原、横町、狐塚、久保在家、竹ノ花などで遺物が採取されている。

第III章 遺跡の概要

第1節 遺跡の概要

今回発掘調査の対象となった古屋敷遺跡は、塩尻市の北東部、片丘南内田山ノ神地籍に位置し、高ボッチ山麓の緩やかな丘陵上に存在する。発掘地区は山ノ神集落の裏手にある畑地に設定され、調査面積は2,000m²に及んだ。

調査の結果、遺構には縄文時代前期末の竪穴住居址5軒と小豎穴184基が検出され、これらの遺構に伴って縄文時代前期諸構C式、十三菩提式、縄文時代晩期のそれぞれの土器と、石錐、石匙、石錐、横刃型石器、打製石斧、ビエス・エスキュー、不定形石器などの石器が出土した。

住居址は重複が2ヶ所もみられるため、前期末でもかなり時間幅のある集落跡であったことが伺われる。分布から調査区の南側および西側（事業対象外）へ広く展開していたことが推察される。小豎穴は第69号（E-3）のみが縄文時代晩期に属し、浅鉢を産出している。他の小豎穴で土器の出土がみられたものは全て前期に属するものであった。

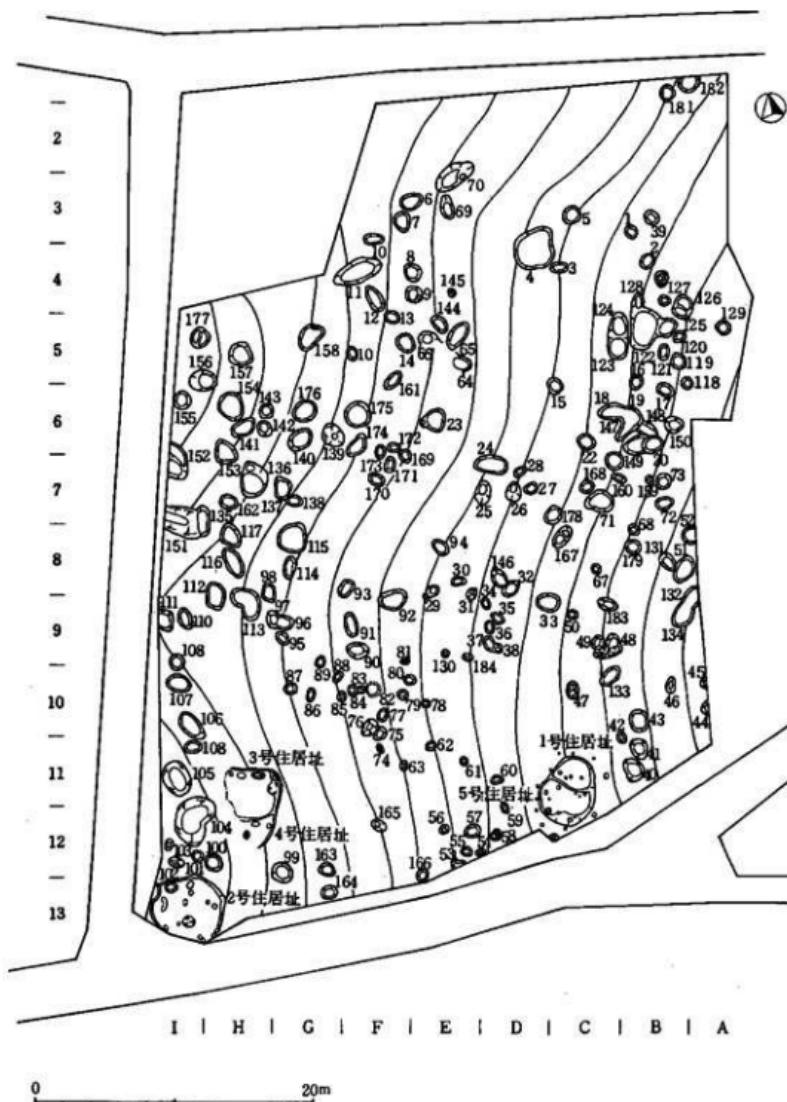
遺物は、検出された遺構数の割には量的に少ない感があった。おそらく表土の流出や耕作による擾乱等でかなり消失しているものと思われる。しかし前期の遺跡に特有な石錐、石匙といった狩猟具も極端に少ない傾向がみられることから、ある程度、特異的な前期集落とみなすことはできよう。

第2節 発掘区の設定

遺跡の立地する丘陵は斜面に沿って東西に長く延びており、元々はこの下にかなり大規模な集落跡があったことが容易に伺える。しかし斜面の上方部はすでに過去の造成工事の際、破壊されており、採集遺物は皆無であった。また今回の調査区の西側と南側は事業区域外となっている。調査区の北側には東西方向に低湿地帯があり、ここが遺跡の北限とみられるため調査可能な地区は調査地区図にみられる範囲に限定された。

発掘調査に先立つ試掘調査によれば、調査区東域で50cm、西域で60cmの表土厚を測る。斜面方向に漸次深くなっているが、これは畑の表面を水平にしただけのことである。北域は現況から3段の畑（元は水田）になっており各段の東側は著しい削平を被っている。特に一番西側の段については全面深く削平されていたためすでに遺構面が破壊を受けていると判断し、調査を行わなかつた。

調査はまずバックホーによる表土除去を行ったのちグリッドを設定した。グリッドは5m間隔で東から西へ向かってA~I、北から南へ向かって1~13のクイを設けた。発掘総面積は2,000m²である。



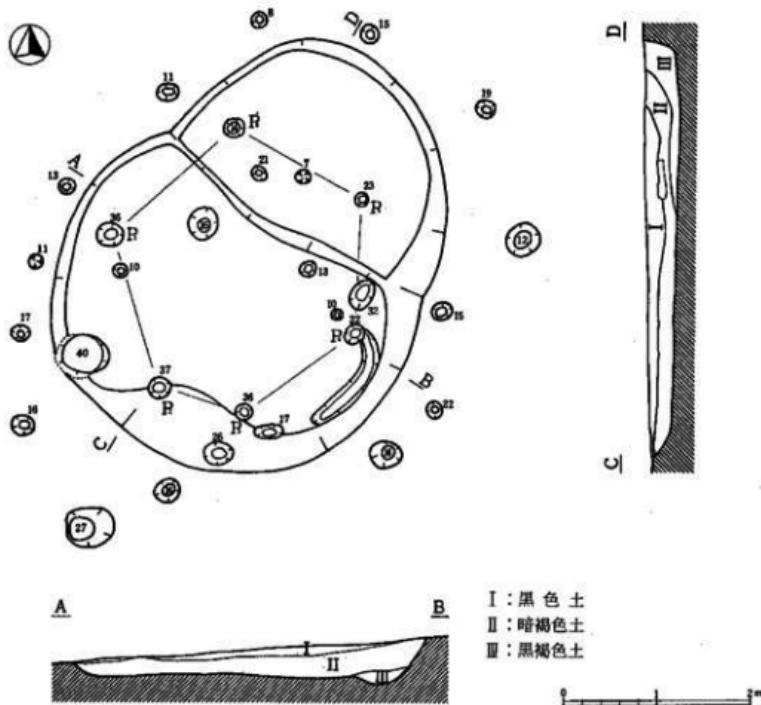
第3図 古尾敷遺跡全体図

第IV章 遺構

第1節 住居址

第1号住居址

本址は調査区南端のC-11グリッドに位置し、南隣りに第5号住居址が貼床で重複している。両者は検出時および覆土掘り下げる段階では1軒の住居址と考えられていたが、壁出しによりプランが明確になるにつれ括れが顕著になり、床面では若干の比高差を認めたことにより区別された。地山がかなり緻密だったため床面の状態が悪く、このため貼床の存在を明確に把握することはできなかった。



プランは円形を呈し、規模は東西 320 m、南北 290 m（推定）とやや小形である。

壁は西壁がほぼ垂直であるのに対し、東壁はやや傾斜を有している。これは地山の傾斜方向から推察して壁の崩れを意味しているものと考えられる。壁高は東壁 45 cm、西壁 19 cm、北壁 43 cm を測り、南側の第 5 号住居址床面との比高差は 8 cm である。

床面は礫質で凹凸が著しく、中央が低い擂鉢状を呈している。ピットは床面上に 4 基確認されたが、いずれも小規模で、柱穴という観点からみればむしろ壁外のものに注目される。壁外柱穴は住居から 20~60 cm 隔れた位置に約 1 m 間隔で認められるもので、同様のものが第 5 号住居址の周囲にも認められる。

床面には炉、周溝等その他の施設は発見されなかった。

第 2 号住居址

本址は調査区西南端にあり、H・I-13 グリッドに位置する。重機を用いた表土剥ぎの際、最初にここから始めたが、試掘により推測された表土厚の倍近い 80 cm の深さに達してもロームに到達しないため、当初からある程度、遺構の存在が伺われた。掘り下げの過程で包含層中にも、かなりの遺物が出土していたが、堅い床面と、ほぼ垂直な良好な壁面を確認して住居址と断定した。

プランは南側が土手の下へ潜っているため全容を現すことはできなかったが、壁の状況から推して楕円形の平面形態を呈するものと推察され、東西 540 cm、南北 500 cm 以上を測る。長軸方向は N-70°-W である。

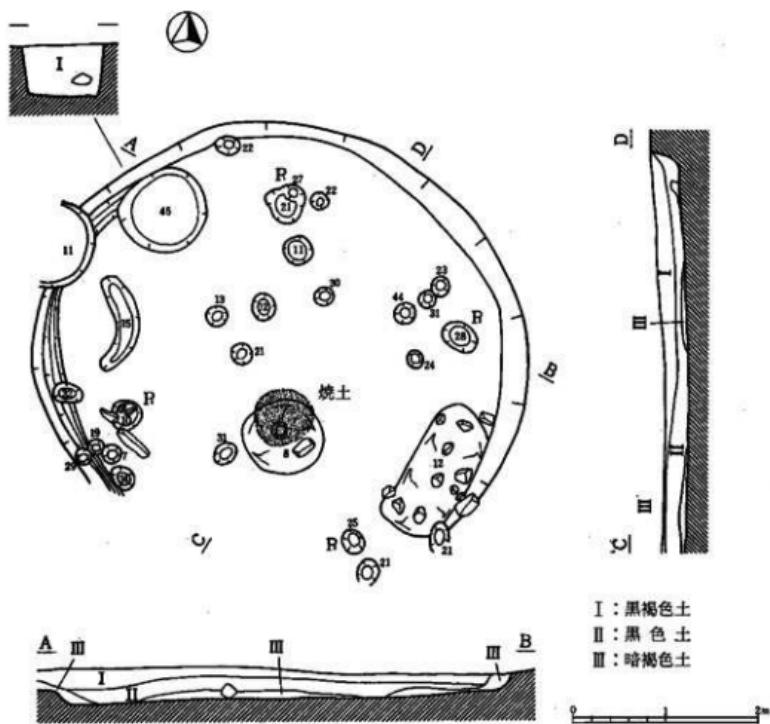
壁は北壁と東壁のみが検出されたが、垂直に掘り込まれた良好な面を有している。壁高は北壁 33 cm、東壁 29 cm を測る。

床は水平平坦で、よく踏み固められた堅緻なものである。ピットは床面に多数みられるが、主柱穴は 4 本と思われ、P₁ (27)、P₂ (28)、P₃ (25)、P₄ (10) が該当する。炉は中央南寄りに径 90 cm の僅かに掘り込まれた窪みがあり、炉石と思われる礫と多量の焼土が分布していたことから石囲炉と考えられる。他にも南西隅と南東隅に炉石状の礫が発見されたが、性格をえるにいたらなかった。周溝は西壁沿いにみられ、深さ 8~13 cm とかなり良好なものである。

本址は調査区中最も低所にあり、このためひとたび降雨になると防水対策に悩まされた。住居の構築場所としてはやや不自然なものを感じさせる。

第 3 号住居址

本址は調査区西側の G・H-11・12 グリッドにあり、南側には第 4 号住居址が重複で接している。調査区南西側の落ち込み（第 2 号住居址）を調べるために、幅 1 m の南北トレンチを少し長めに設定し掘り下げたところ、トレンチの北端で住居址の床面を検出する。落ち込みとはかなり比高差があるため別の住居址と断定する。南側は同レベルで第 4 号住居址が重複しており、前者



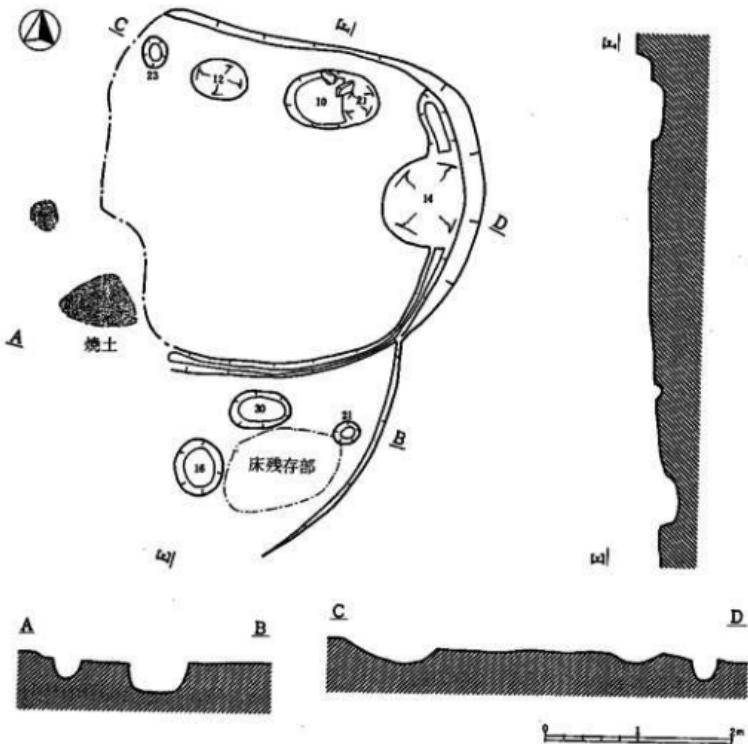
第5図 第2号住居址

が後者を斬っている。また西側は地形傾斜により床が流れて消滅している。

プランは全容が把えられないが、東西 410 cm 以上、南北 380 cm の楕円形を呈しており、長軸方向は N-75°-W を指す。

壁は東壁と北壁が残存しており、壁高はそれぞれ 14 cm、16 cm と低い。おそらく地表流水による浸食作用が進んだものと思われる。

床はよく踏み固められ堅緻である、概して西側へ緩く傾斜しており、また第4号住居址との重複部分は貼床でこれを被っている。炉は北壁下に炉石大の礫を 2 個伴う掘り込みがあり、また西側に焼土の堆積が 2ヶ所発見されたが、いずれも断定するに到らなかった。周溝は東壁下から南側へ半周回っており、深さ 5 cm 前後と掘り込みは深い。



第6図 第3・4号住居址

第4号住居址

本址はH-12グリッドにあり、北側に第3号住居址が貼床で重複している。両者は覆土を掘り下していく過程では1軒の住居址と考えられていたが、中央部に第3号住居址の周溝を確認して2住居の重複であることが判明した。

本址の依存状態は極めて悪く、本址に明らかに属すると思われるものは、東側に残る壁と部分的な床面のみである。従ってプランをえることはできず、残存壁の在り方より推して、円形もしくは橢円形の平面形態をえるのみである。

壁は概して浅く、南側へ漸減し消滅する。最も深い北端で僅か6cmを測るのみである。床も図に占めされた部分に僅かに堅硬な硬化面が残されているのみであり、これらの消滅状態から推測すると、かなりの攪乱が入っているものとみるべきであろう。

床面にピットが3基検出されたが、いずれも性格を明らかにすることはできなかった。

第5号住居址

本址は調査区南東隅にあり、C・D-11・12グリッドに位置する。本址の北側には第1号住居址が重複しており、本址が貼床を構築している。重複部では5cm前後の比高差を有し、両者の床面の違いは顕著であるが、全体的にはほぼ同レベルであり、直接的な関係がそこに伺われる。

プランは北側を削らされているため全容を覚えることはできないが、第1号住居址と同様に楕円形を呈すると推察され、長軸方向も同じN-55°-Wを指す。確認規模で南北390cm、東西345cmを測る。

壁は西壁がほぼ垂直に掘り込まれているのに対し、南壁と東壁は傾斜を有する。礫質で粗惡な面である。壁高は東壁38cm、南壁24cm、西壁14cmと漸減するが、これも第1号住居址と同様、地山の自然傾斜に影響されていることによる。

床面は礫質で、やや中央が盛んでいる。よく踏み固められており、第1号住居址を覆う貼床も硬質で剥ぎ取りの際、難儀した。支柱穴は6本と思われ、P₁(36)、P₂(37)、P₃(36)、P₄(22)、P₅(23)、P₆(14)が該当しよう。また壁外に20~30cm離れて規則的なピットの並びが観察された。おそらく補助的な支柱穴の役割を果たしたものであろう。

周溝は東壁沿いにだけ検出された。幅20cmで深さ5cmのものである。炉は発見することができなかった。

第2表 住居址一覧表

住所	グリッド	平面形	方 向	規 模	壁 高	炉	周溝	支柱穴	切合い 開 係	時 期
1	C-11	椭 圆	N-58°-W	314×(285)	45-19-···-33	——	なし	壁外	→ 5 H	
2	H-I-13	椭 圆	N-70°-W	540×(500)	29-···-33	石窯炉	一部	(4)		
3	G-H-11-12	椭 圆	N-75°-W	(410)×380	14-···-16	——	半溝		← 4 H	
4	H-12	——	——	——	6-···-—	——	なし		→ 3 H	
5	C-D-11-12	椭 圆	N-55°-W	390×345	38-14-24-···	——	一部	6	← 1 H	

第2節 小 穴

小穴は、総数184基発見され、調査地区内のほぼ全域にわたって分布がみられる。いずれも検出面はローム面の僅か上方の暗褐色土層中にあり、小穴自身の覆土は暗褐色土と黒褐色土の2者であった。このうち後者については助簾による削平の際、明瞭な輪郭がえられ容易に検出できたが、前者については識別が難しく、とりわけ検出期間中は雨が少なく地面がカラカラに乾燥したため困難を極めた。两者についてはおそらく形成時期の違いによるものと考えられる。

分布をみると調査区中央付近を中心に半径 20 m の範囲に全体の約 8 割が集中しており、環状の分布を示している。およそ内径 12 m、外径 40 m を測り、等高線方向との関係は伺えない。他の分布域としては第 3 号住居址の西側、第 1・5 号住居址の周辺、および調査区北東隅があるが、前者と区別されるものであるかは不明である。

平面形態には円、楕円、長楕円、方形、三角形、不整形があり、規模としては径 180~300 cm を測る大形のものと径 60~120 cm の小形のものが主体をなす。大形のものは比較的中央域に多く、特に東側が深く、西側が浅いという傾向がみられる。また小形のものは南域に多くみられる。

なお 2 号の隣り (B-4) には集石炉が一基発見されている。楕円形たるい状の掘り込みに径 5~20 cm 大の礫がびっしり詰まっており、礫自身はあまり焼けた痕跡が見られなかったが、底付近に焼土、炭が混入しているところから集石炉と思われる。伴出遺物がなかったため時代は不明である。

第 3 表 小型穴一覧表

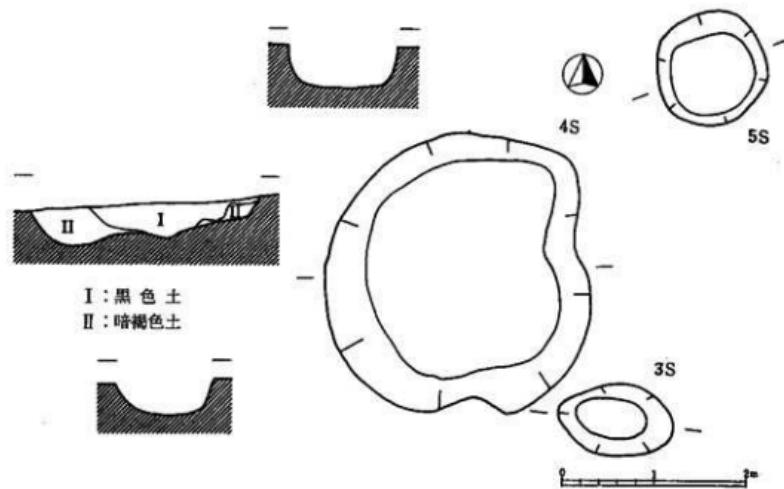
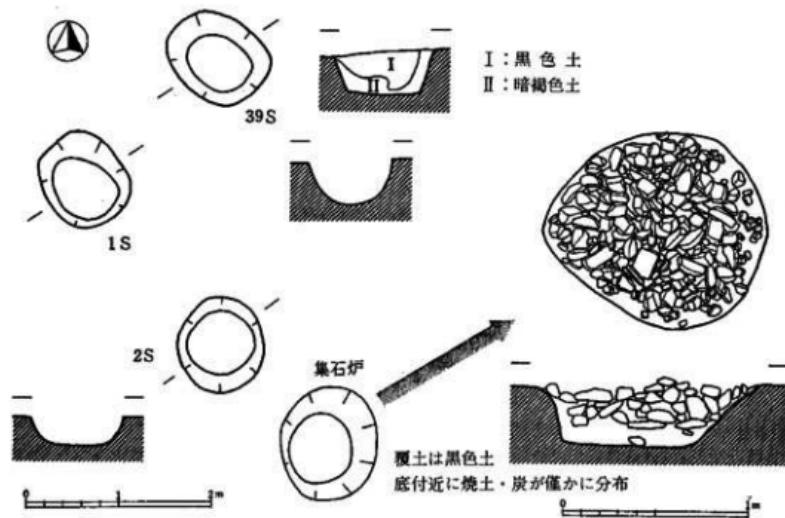
No.	確認規模	平面形	主軸方向	断面形	底面規模	底面	深さ	備考	図版
1	102×88	楕円	N-36°-W	鑿鉢状	75×60	丸底	48		1
2	104×94	楕円	N-S	たらい状	74×68	やや丸底	31		1
3	128×80	長楕円	N-80°-W	鑿鉢状	79×42	丸底	36		1
4	300×290	不整形	N-S	不整形	230×208	段々	41		1
5	120×120	円	—	たらい状	91×84	平坦	43		1
6	167×140	楕円	N-85°-E	たらい状	140×115	平坦	17		2
7	140×126	楕円	N-12°-W	たらい状	108×84	やや丸底	18		2
8	123×103	楕円	N-41°-W	たらい状	98×82	平坦	57		3
9	134×120	楕円	N-60°-W	鑿鉢状	35×30	丸底	54		3
10	124×72	長楕円	E-W	不整形	108×60	段々	20		3
11	342×165	不整形	E-W	鑿鉢状	226×105	丸底	44		3
12	190×124	長楕円	N-28°-W	袋状	146×86	平坦(二段)	36		3
13	116×101	楕円	N-85°-W	不整形	180×70	段々	44		3
14	136×116	楕円	N-18°-W	鑿鉢状	90×70	平坦	30		3
15	126×110	楕円	N-53°-E	たらい状	74×60	平坦(二段)	40		4
16	106×100	楕円	N-28°-W	たらい状	84×74	丸底	21		5
17	140×85	長楕円	N-70°-W	たらい状	106×55	平坦	18		5
18	230×100	長楕円	N-84°-E	たらい状	174×80	やや丸底	23		4
19	148×—	長楕円	N-58°-E	鑿鉢状	106×—	丸底	58		4
20	152×122	楕円	N-83°-W	たらい状	116×100	平坦	80		4

No.	確認規模	平面形	主軸方向	断面形	底面規模	底面	深さ	備考	図版
21	113×106	楕円	N-72°-E	擂鉢状	87×80	丸底	33		4
22	124×116	楕円	N-78°-W	たらい状	102×90	平坦(二段)	50		4
23	177×172	楕円	N-10°-W	擂鉢状	145×108	丸底	39		9
24	242×142	長楕円	N-70°-W	たらい状	204×122	段々	31		6
25	153×114	楕円	N-28°-E	擂鉢状	82×72	丸底	54		6
26	140×104	楕円	N-10°-E	擂鉢状	68×64	丸底	20		6
27	120×100	楕円	N-50°-E	たらい状	90×74	平坦	50		6
28	101×72	楕円	N-65°-E	たらい状	75×51	やや丸底	18		6
29	104×66	楕円	N-62°-E	たらい状	50×50	平坦	22		2
30	93×78	不整形	N-70°-W	たらい状	72×37	平坦	45		7
31	80×70	楕円	N-20°-E	擂鉢状	37×30	丸底	17		7
32	152×92	長楕円	N-45°-E	擂鉢状	101×66	丸底	50		7
33	170×142	楕円	N-73°-W	たらい状	130×108	平坦	20	底に礫1個	8
34	83×71	楕円	N-10°-E	擂鉢状	53×47	丸底	22		7
35	108×66	長楕円	N-45°-W	擂鉢状	93×48	丸底	31		7
36	97×67	長楕円	N-S	袋状	78×53	丸底	32	底に礫1個	7
37	115×80	楕円	N-25°-W	たらい状	81×54	平坦	20		7
38	79×57	楕円	N-57°-E	擂鉢状	54×30	丸底	21		7
39	110×90	楕円	N-52°-W	たらい状	70×54	平坦	46		1
40	150×120	楕円	N-S	たらい状	91×86	平坦	36		9
41	132×119	楕円	N-10°-W	たらい状	82×74	平坦	47		9
42	80×66	楕円	N-35°-E	たらい状	60×47	やや丸底	13		9
43	142×127	楕円	N-7°-W	たらい状	114×100	平坦(二段)	46		9
44	92×48	円	—	擂鉢状	48×48	丸底	18		9
45	78×60	楕円	N-43°-W	擂鉢状	48×24	丸底	15		9
46	110×62	長楕円	N-30°-E	擂鉢状	72×30	丸底	30		9
47	112×96	楕円	N-18°-W	擂鉢状	82×78	丸底	30		8
48	206×160	不整形	N-76°-E	擂鉢状	88×58	丸底	32		8
49	106×84	楕円	N-7°-E	擂鉢状	80×70	丸底	18		8
50	70×68	円	—	擂鉢状	52×42	丸底	28		8
51	202×140	楕円	N-S	たらい状	156×110	平坦	54		6
52	115×72	円	—	たらい状	90×58	平坦	41		6
53	68×90	不整形	N-18° W	擂鉢状	68×60	丸底	29		10
54	66×53	楕円	N-75°-W	擂鉢状	44×33	丸底	19		10
55	71×60	楕円	N-65°-W	擂鉢状	53×40	平坦	18		10
56	70×60	楕円	N-52°-W	たらい状	51×40	丸底	15		10
57	120×93	楕円	E-W	擂鉢状	93×70	丸底	19		10
58	90×79	不整形	N-25°-E	擂鉢状	51×32	丸底	15		10
59	71×63	楕円	N-32°-W	擂鉢状	59×43	平坦	15		10
60	86×59	長楕円	E-W	たらい状	72×37	丸底	21		10
61	61×57	楕円	N-10°-W	たらい状	44×41	やや丸底	19		10

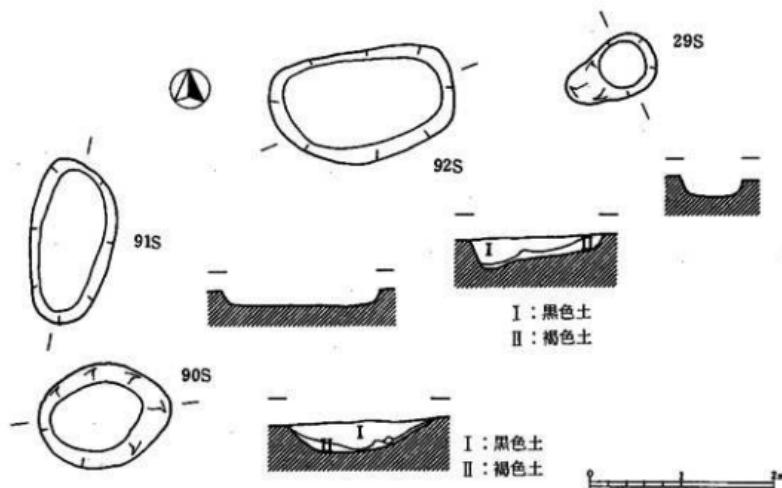
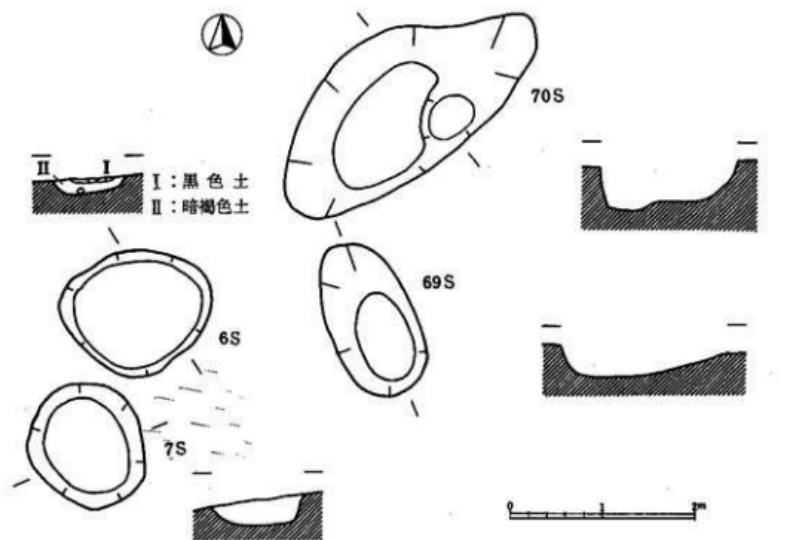
No.	確認規模	平面形	主軸方向	断面形	底面規模	底面	深さ	備考	図版
62	64×58	楕円	E-W	たらい状	49×40	平坦	14		11
63	80×54	楕円	N-30°-E	たらい状	64×34	平坦	30		11
64	150×94	長楕円	N-78°-W	擂鉢状	121×84	やや丸底	50		9
65	200×116	長楕円	N-28°-E	たらい状	143×84	平坦	30		3
66	144×100	楕円	N-80°-W	たらい状	98×64	平坦	51		3
67	62×60	楕円	N-30°-E	たらい状	48×42	丸底	14		12
68	89×83	楕円形	N-65°-W	たらい状	72×62	平坦	26		6
69	176×94	長楕円	N-21°-W	擂鉢状	100×66	平底	33		2
70	323×154	長楕円	N-54°-E	不整形	110×90	段々	46		2
71	182×128	長方形	N-35°-W	擂鉢状	142×98	段々	19		12
72	80×70	楕円	N-65°-W	擂鉢状	58×45	丸底	23		12
73	118×100	方形	N-60°-E	袋状	86×78	平坦	50		4
74	50×41	方形	N-S	たらい状	34×30	やや丸底	14		11
75	110×95	楕円	N-56°-E	たらい状	80×73	丸底	42		11
76	128×98	楕円	N-70°-E	擂鉢状	62×44	丸底	23		11
77	90×82	楕円	N-50°-E	たらい状	78×65	平坦	30		11
78	55×51	楕円	N-15°-W	擂鉢状	35×33	丸底	23		11
79	87×68	楕円	N-55°-W	擂鉢状	70×44	丸底	11		11
80	80×69	方形	E-W	擂鉢状	60×52	丸底	23		11
81	57×41	楕円	N-60°-W	擂鉢状	43×31	丸底	18		11
82	88×83	楕円	N-60°-E	袋状	100×95	平坦	28		11
83	90×64	長楕円	N-75°-W	たらい状	64×41	やや丸底	27		11
84	85×74	楕円	N-28°-D	たらい状	68×64	やや丸底	23		11
85	84×74	楕円	N-13°-E	擂鉢状	55×41	丸底	31		13
86	90×50	長楕円	N-30°-E	擂鉢状	71×26	丸底	34		13
87	102×82	楕円	N-20°-W	擂鉢状	80×60	丸底	35		13
88	81×55	楕円	N-55°-E	擂鉢状	51×40	やや丸底	33		13
89	74×63	方形	N-S	たらい状	57×47	平坦	11		13
90	145×114	楕円	N-84°-E	擂鉢状	101×74	丸底	32		2
91	180×88	長楕円	N-9°-E	たらい状	157×67	平坦	17		2
92	200×120	長楕円	N-86°-E	擂鉢状	170×92	平坦	33		2
93	140×114	楕円	N-75°-E	擂鉢状	110×79	丸底	23		12
94	143×104	楕円	N-20°-W	擂鉢状	122×82	丸底	24		12
95	98×66	楕円	N-S	たらい状	70×43	平坦	22		13
96	140×108	楕円	N-80°-W	擂鉢状	100×74	丸底	19		13
97	132×86	楕円	N-15°-E	擂鉢状	90×61	丸底	21		13
98	158×153	方形	N-20°-W	たらい状	121×100	平坦	21		14
99	238×180	楕円	N-45°-E	擂鉢状	145×110	丸底	52		15
100	140×130	楕円	N-55°-W	たらい状	120×110	平坦	72		16
101	98×93	円	——	擂鉢状	70×69	丸底	33		16
102	105×76	楕円	N-80°-W	擂鉢状	68×42	丸底	18		16

No.	確認規模	平面形	主軸方向	断面形	底面規模	底面	深さ	備考	図版
103	88×62	楕円	N-40°-E	擂鉢状	51×32	丸底	33		16
104	335×238	不整形	N-25°-E	擂鉢状	234×130	丸底	65		16
105	242×188	楕円	N-S	擂鉢状	146×111	丸底	38		16
106	145×135	楕円	N-S	擂鉢状	115×104	丸底	51		17
107	181×122	楕円	N-80°-W	たらい状	138×88	平坦	30		17
108	132×122	楕円	N-25°-E	擂鉢状	105×100	丸底	32		17
109	102×74	楕円	N 50°-E	たらい状	81×60	平坦	23		17
110	140×100	楕円	N-10°-W	たらい状	103×70	平坦	17		17
111	178×121	楕円	N-35°-W	擂鉢状	104×66	丸底	52		17
112	191×148	不整形	N-S	擂鉢状	166×118	丸底	26		14
113	228×206	不整形	N-5°-W	擂鉢状	191×179	丸底	18		14
114	138×96	楕円	N-10°-E	擂鉢状	140×63	丸底	24		14
115	210×210	円	—	たらい状	194×186	平坦	20		14
116	226×132	長椭円	N-30°-W	たらい状	190×93	段々	23		14
117	166×140	方形	N-70°-W	たらい状	135×110	平坦	21		14
118	86×74	楕円	N-50°-W	たらい状	58×50	丸底	34		5
119	126×126	円	—	たらい状	104×101	平坦	30		5
120	98×70	楕円	N-8°-E	擂鉢状	69×50	丸底	43		5
121	141×91	長椭円	N-S	擂鉢状	96×60	丸底	34		5
122	306×204	長椭円	N-10°-E	擂鉢状	240×160	丸底	73		5
123	172×164	楕円	N-60°-E	擂鉢状	130×121	丸底	40		5
124	180×148	楕円	N-5°-W	擂鉢状	122×104	丸底	46		5
125	146×142	円	N-80°-W	擂鉢状	113×104	丸底	50		5
126	176×170	楕円	N-28°-E	擂鉢状	122×60	段々	39		5
127	70×66	楕円	N-55°-E	擂鉢状	42×42	丸底	30		5
128	150×82	長椭円	N-10°-E	擂鉢状	96×42	丸底	30		5
129	110×104	楕円	N-30°-W	擂鉢状	86×73	丸底	32		5
130	64×54	楕円	N-13°-E	擂鉢状	41×36	丸底	26		7
131	142×110	長椭円	N-77°-W	擂鉢状	96×62	丸底	32		6
132	150×132	楕円	N-10°-E	たらい状	126×94	平坦	18		6
133	176×98	長椭円	N-35°-E	たらい状	150×71	段々	25		8
134	164×150	楕円	N-10°-E	たらい状	132×110	平坦	22		6
135	217×142	楕円	N-S	擂鉢状	185×111	丸底	36		18
136	257×191	楕円	N-15°-W	たらい状	153×140	平坦(二段)	50		18
137	170×128	楕円	N-15°-W	たらい状	140×100	段々	14		18
138	123×100	楕円	N-80°-W	擂鉢状	78×64	丸底	20		18
139	180×150	楕円	N-45°-W	擂鉢状	57×42	丸底	32		19
140	182×134	楕円	N-63°-E	たらい状	137×106	平坦	11		19
141	164×136	楕円	N-80°-E	たらい状	130×96	やや丸底	25		20
142	130×96	楕円	N-15°-W	擂鉢状	72×50	丸底	29		20
143	109×100	楕円	N-60°-W	擂鉢状	75×70	丸底	32		20

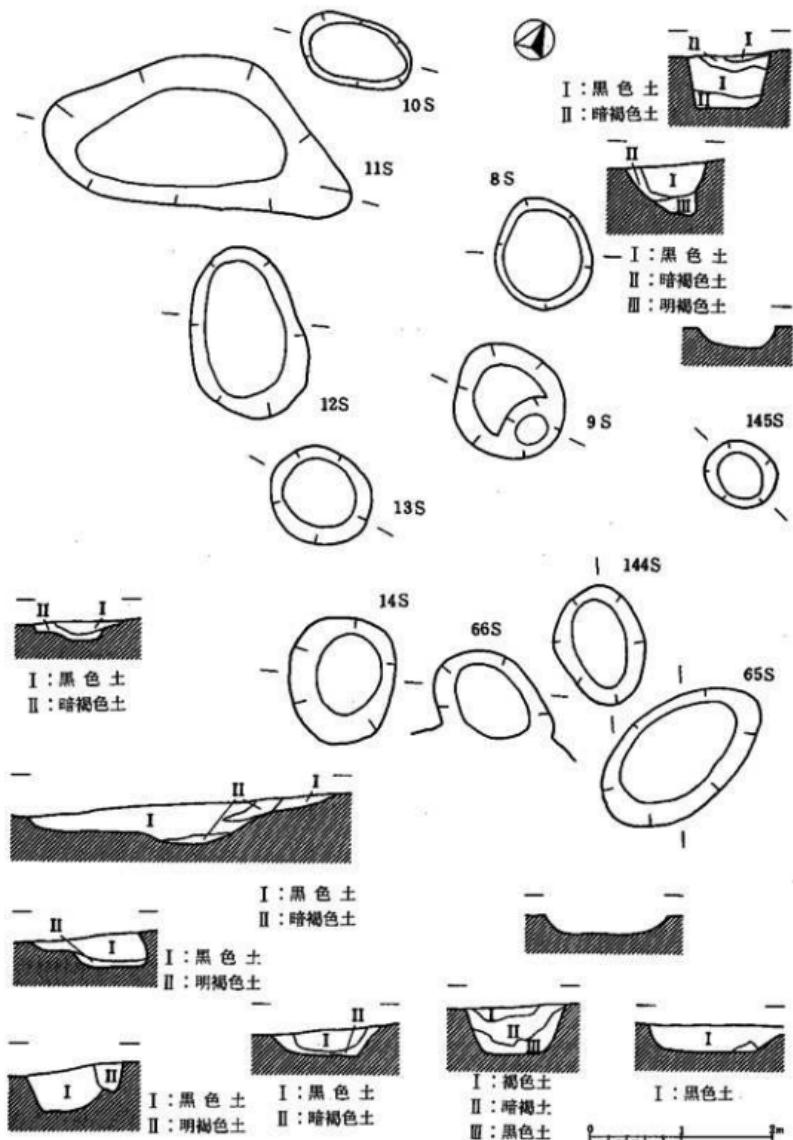
No	確認規格	平面形	主軸方向	断面形	底面規格	底面	深さ	備考	図版
144	130×96	長楕円	N-40°-W	たらい状	94×58	やや丸底	18		3
145	80×70	楕円	N-80°-W	たらい状	54×43	やや丸底	24		3
146	150×100	長楕円	N-40°-W	擂鉢状	104×60	丸底	30		7
147	250×100	長楕円	N-64°-E	たらい状	218×66	段々	50		4
148	170×114	長楕円	N-30°-W	擂鉢状	140×70	丸底	40		4
149	222×118	長楕円	N-83°-E	擂鉢状	184×90	丸底	36		4
150	134×124	楕円	N-78°-W	たらい状	80×78	やや丸底	32		4
151	(260)×200	楕円	N-50°-W	擂鉢状	(162)×60	丸底	51		18
152	254×110	楕円	N-S	擂鉢状	104×66	二段	48		18
153	182×158	三角形	N-5°-W	擂鉢状	130×120	丸底	34		18
154	204×182	楕円	N-45°-W	擂鉢状	182×156	丸底	22		20
155	118×100	楕円	N-55°-E	擂鉢状	60×50	丸底	20		20
156	194×142	楕円	N-85°-W	たらい状	126×104	平坦	26		20
157	186×164	楕円	N-15°-W	たらい状	144×136	段々	20		20
158	192×140	楕円	N-40°-E	たらい状	60×34	段々	18		20
159	72×72	円	—	たらい状	53×50	平坦	28		4
160	116×60	長楕円	N-50°-W	たらい状	54×38	やや丸底	30		4
161	162×105	長楕円	N-46°-E	擂鉢状	105×68	丸底	40		9
162	130×110	楕円	N-75°-W	擂鉢状	94×82	丸底	18		18
163	115×94	楕円	N-40°-W	擂鉢状	83×60	やや丸底	30		15
164	92×90	円	—	擂鉢状	63×54	平坦	30		15
165	114×80	楕円	N-45°-W	擂鉢状	51×43	丸底	26		15
166	104×90	楕円	N-40°-E	たらい状	82×70	平坦	24		15
167	172×90	長楕円	N-66°-E	たらい状	74×62	平坦(二段)	31		12
168	108×98	楕円	N-70°-E	たらい状	83×72	段々	28		12
169	110×77	楕円	N-10°-W	たらい状	74×44	段々	20		19
170	120×92	楕円	N-62°-W	擂鉢状	98×68	丸底	20		19
171	112×90	楕円	N-10°-W	擂鉢状	78×56	丸底	25		19
172	104×84	楕円	N-80°-W	擂鉢状	84×70	丸底	20		19
173	98×74	楕円	N-30°-W	たらい状	74×56	段々	25		19
174	170×108	三角形	N-25°-E	たらい状	134×72	段々	20		19
175	178×172	円	—	たらい状	144×144	やや丸底	22		19
176	184×148	楕円	N-75°-E	擂鉢状	160×126	丸底	13		19
177	145×132	楕円	N-70°-E	たらい状	84×46	平坦(二段)	46		20
178	134×106	楕円	N-67°-E	擂鉢状	94×66	丸底	34		12
179	110×102	楕円	N-50°-E	たらい状	95×85	段々	30		6
180	134×92	楕円	N-85°-W	たらい状	116×90	やや丸底	22		16
181	140×102	楕円	N-13°-W	擂鉢状	118×80	丸底	38		13
182	151×133	楕円	N-53°-W	たらい状	125×114	丸底	34		13
183	138×80	長楕円	N-60°-W	擂鉢状	80×54	丸底	56		8
184	70×54	楕円	N-73°-W	擂鉢状	53×40	丸底	15		7



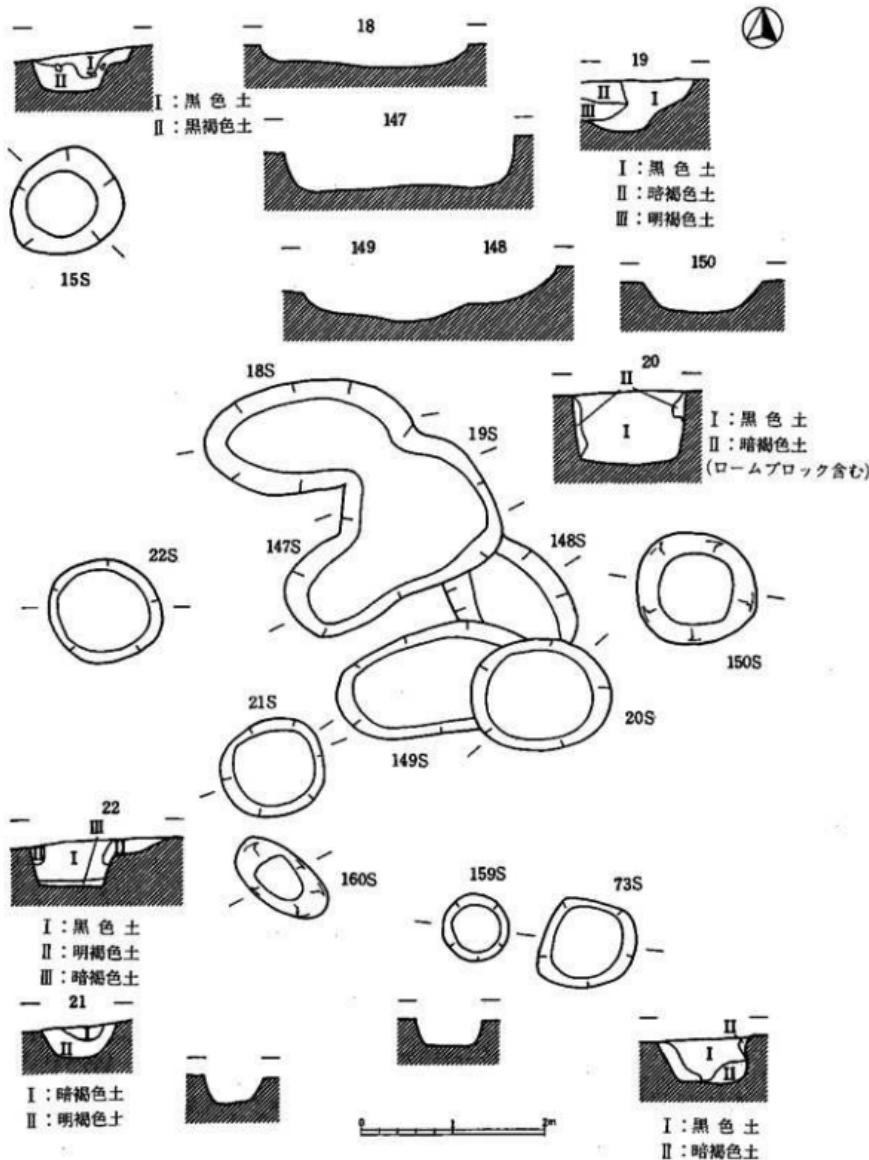
第7図 小堅穴群 (1)



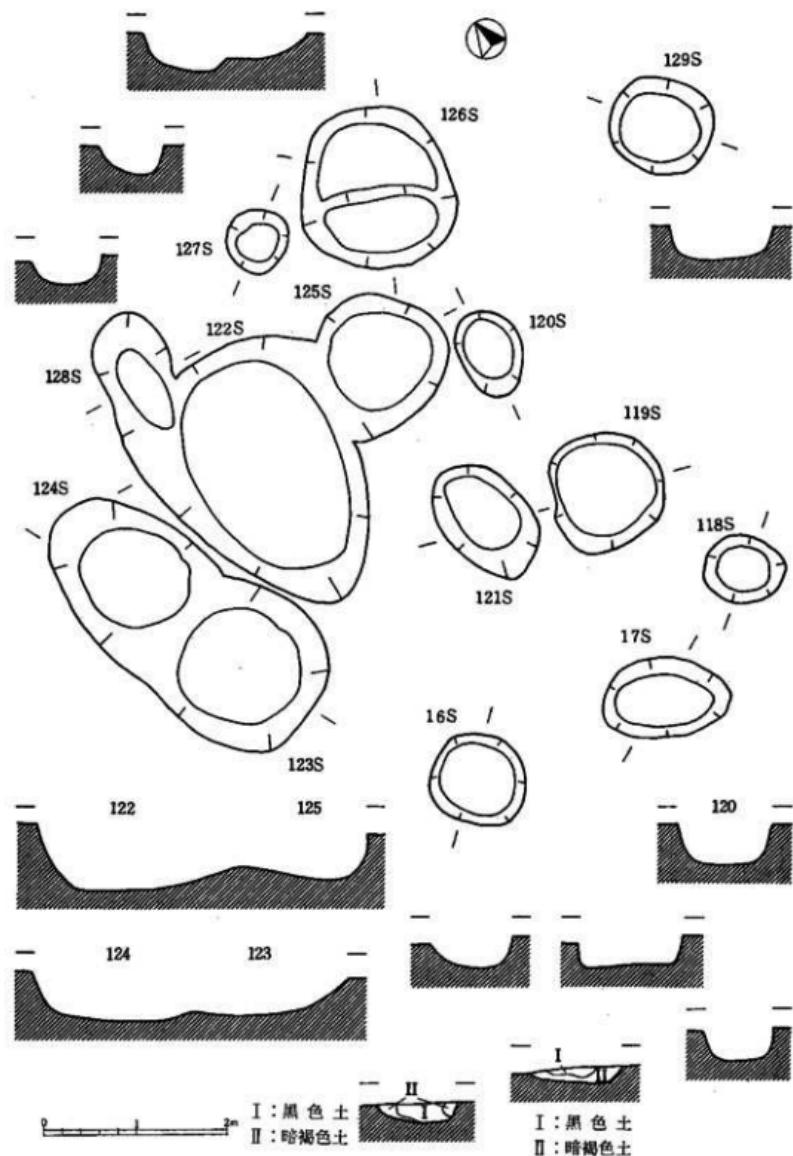
第8図 小豊穴群 (2)



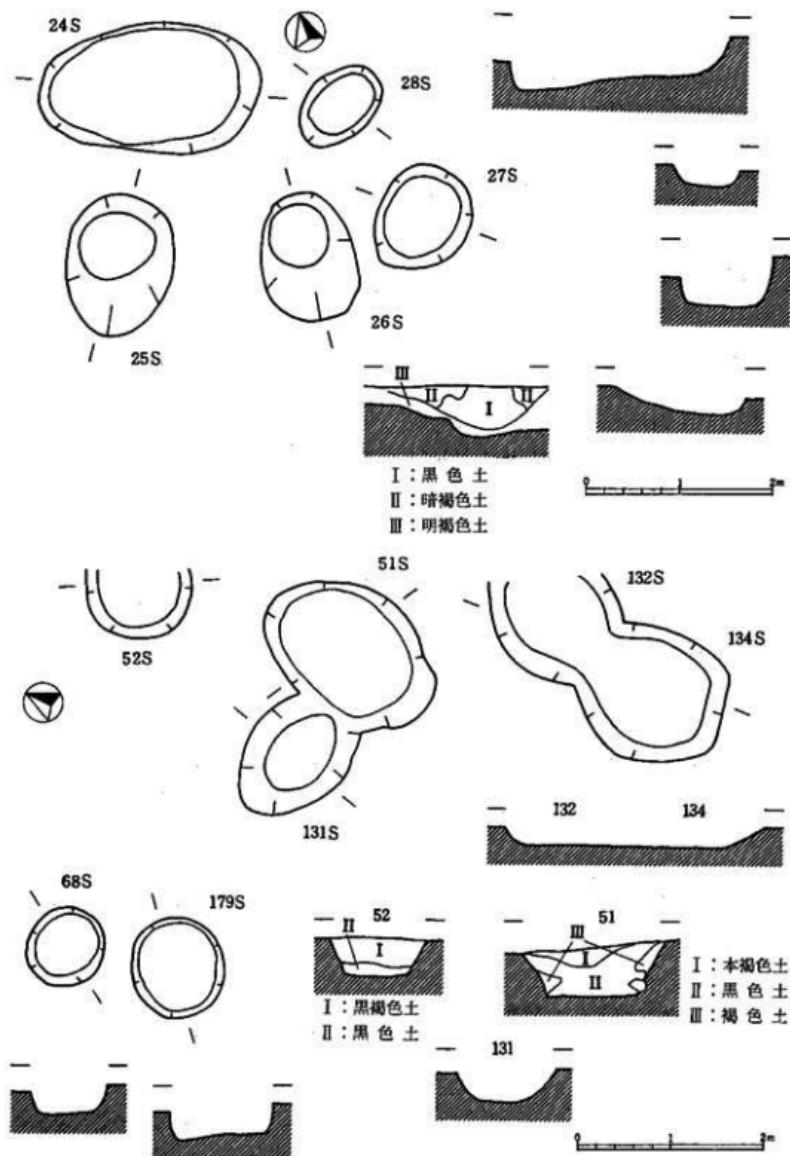
第9図 小型穴群 (3)



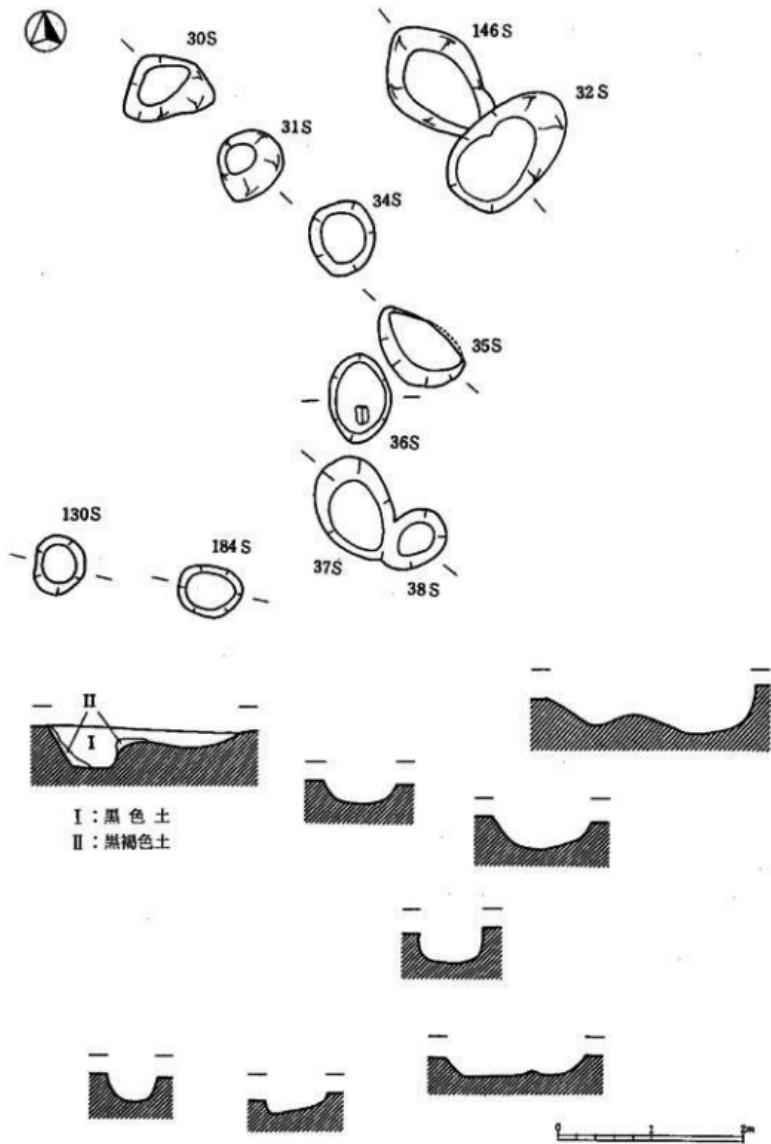
第10図 小穀穴群 (4)



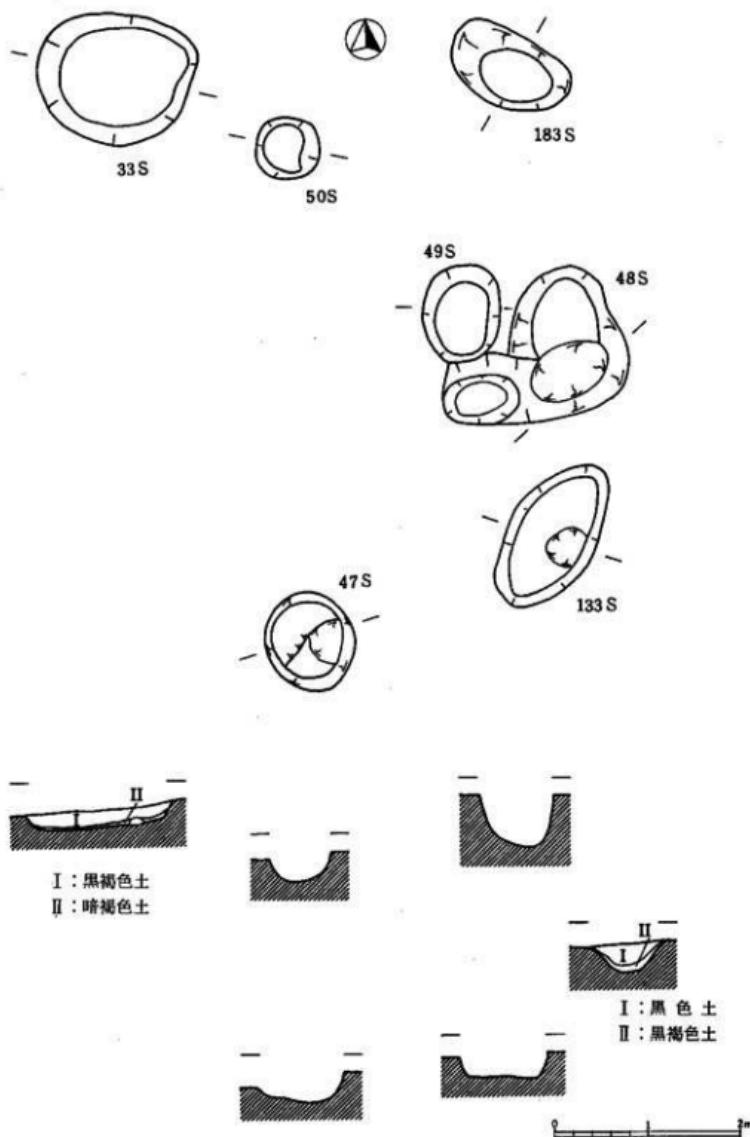
第11図 小型穴群 (5)



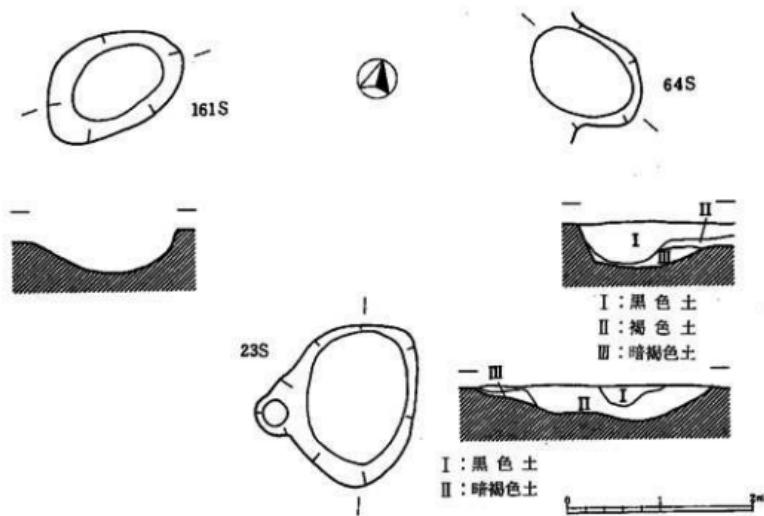
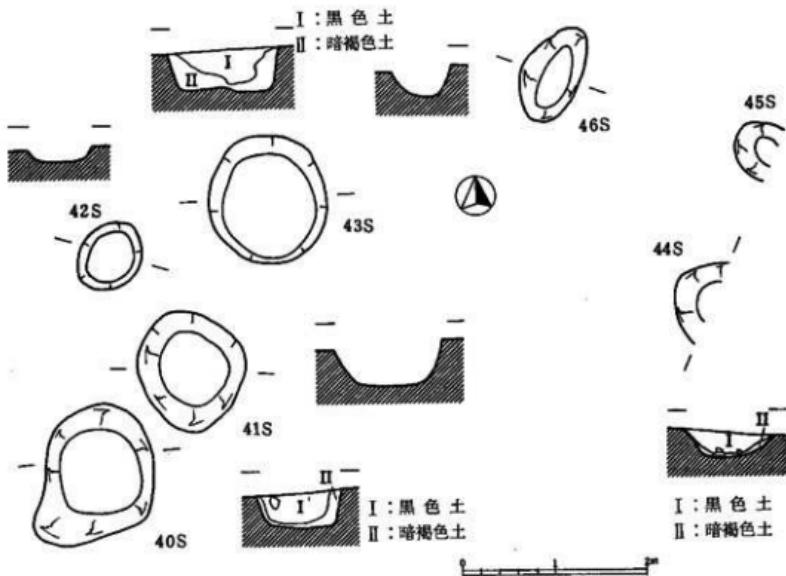
第12図 小型穴群 (6)



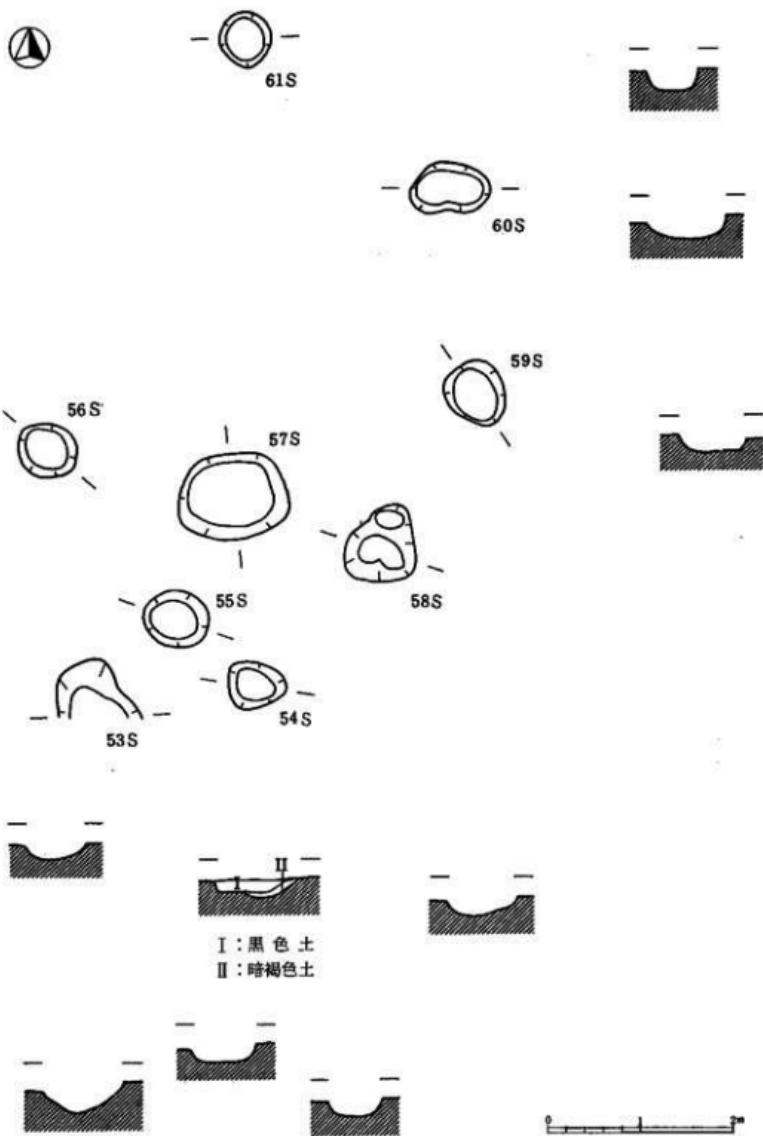
第13図 小竪穴群 (7)



第14図 小竪穴群 (8)

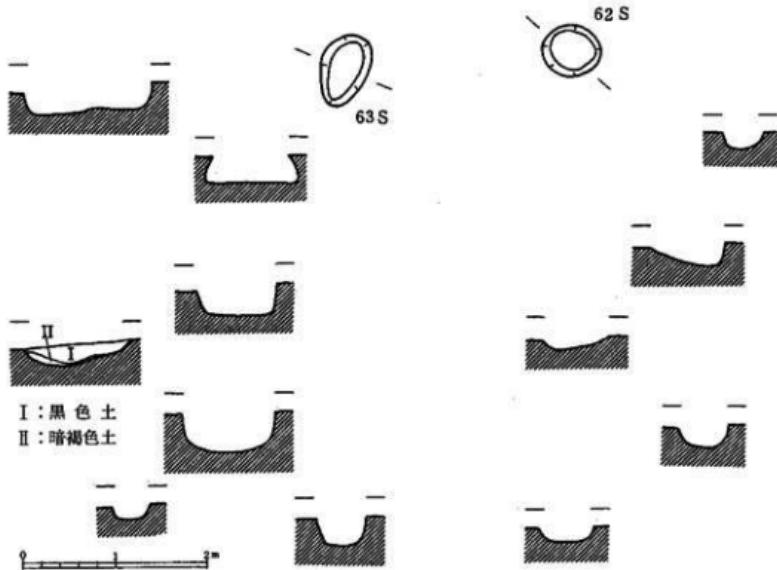
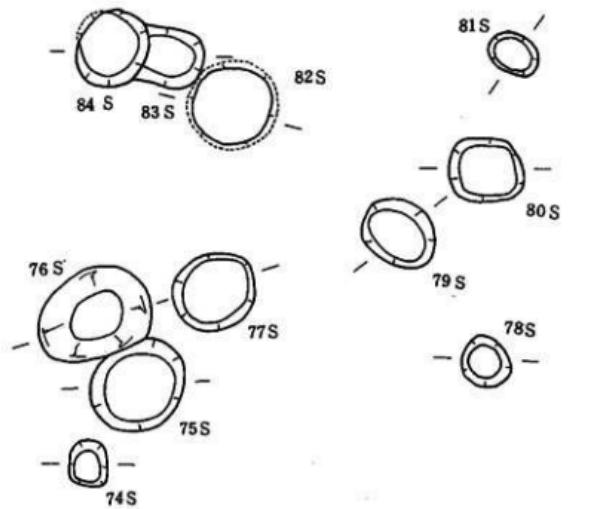


第15図 小竪穴群 (9)

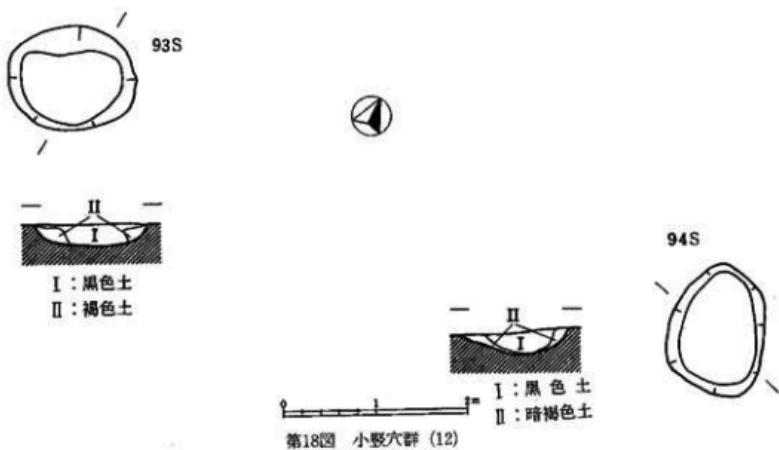
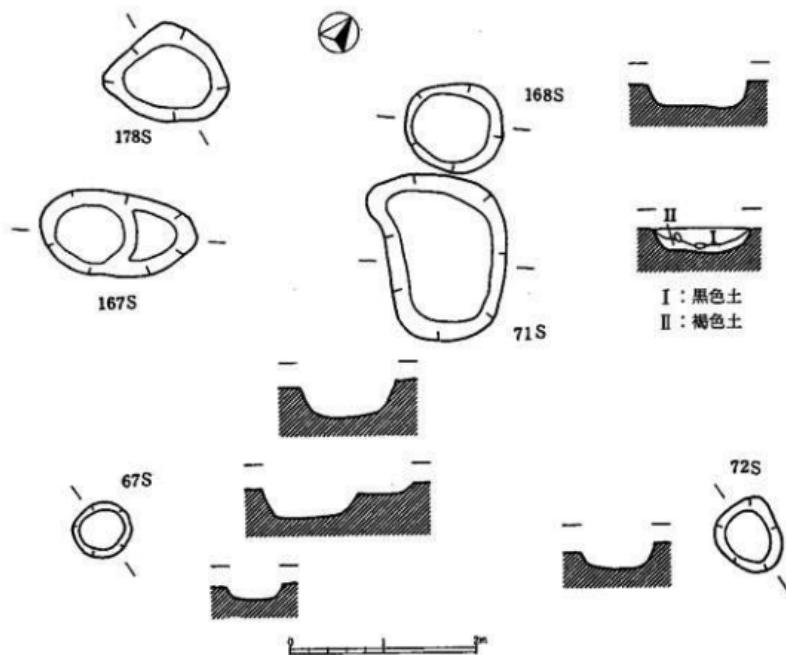


第16図 小型穴群 (10)

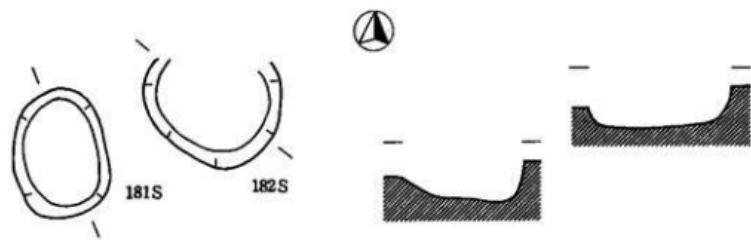
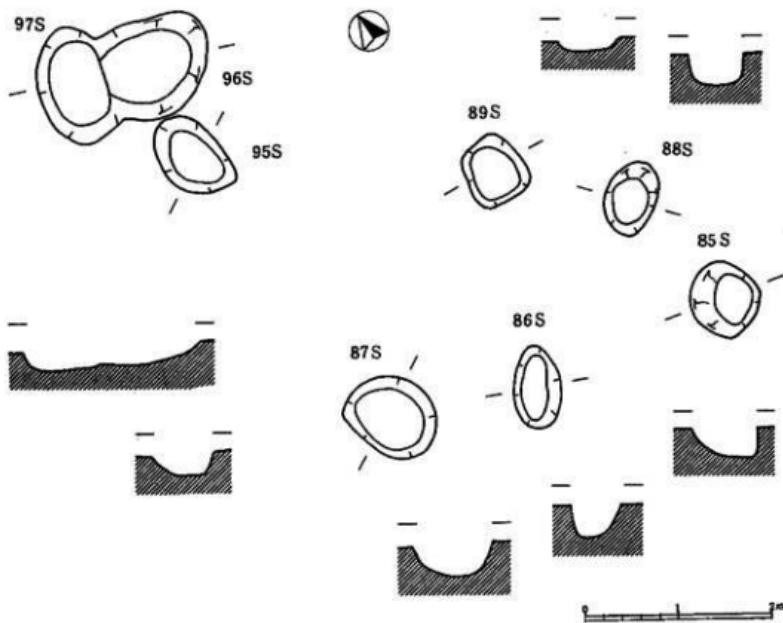
Ⓐ



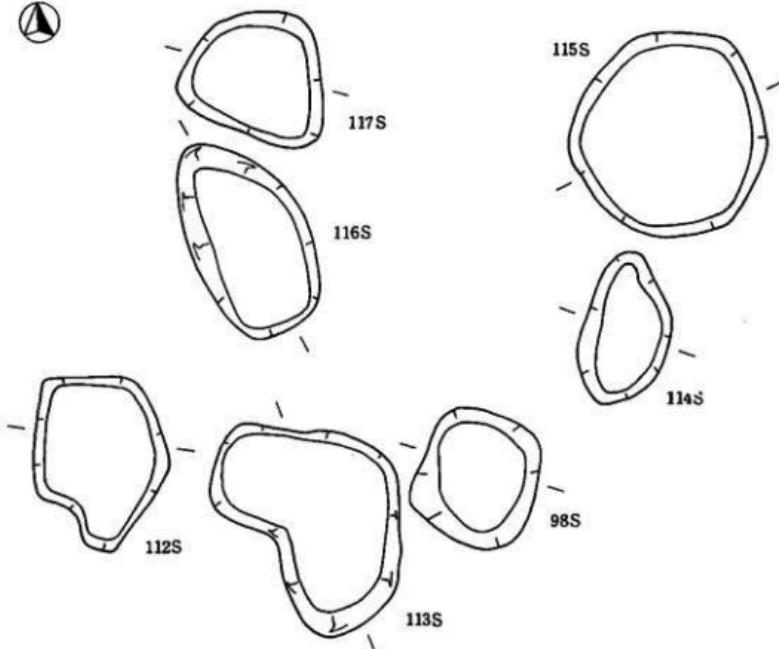
第17図 小豊穴群 (11)



第18図 小型穴群 (12)



第19図 小豊穴群 (13)



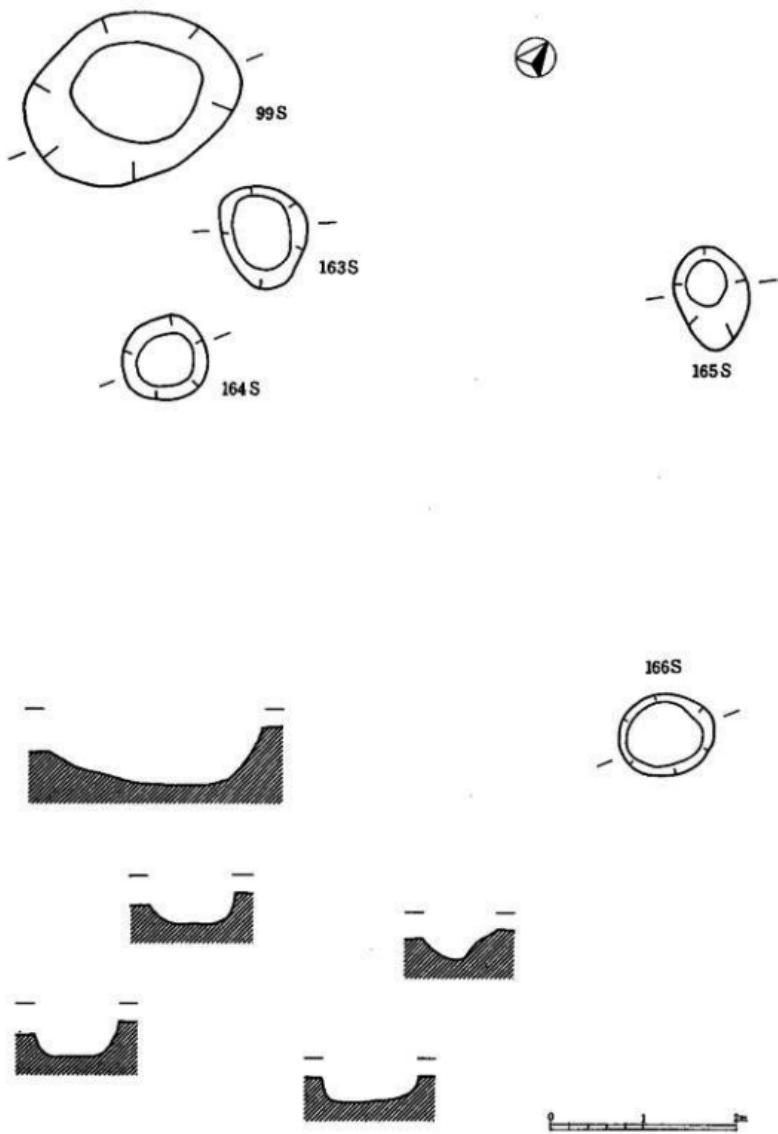
I : 黒色土
II : 黑褐色土



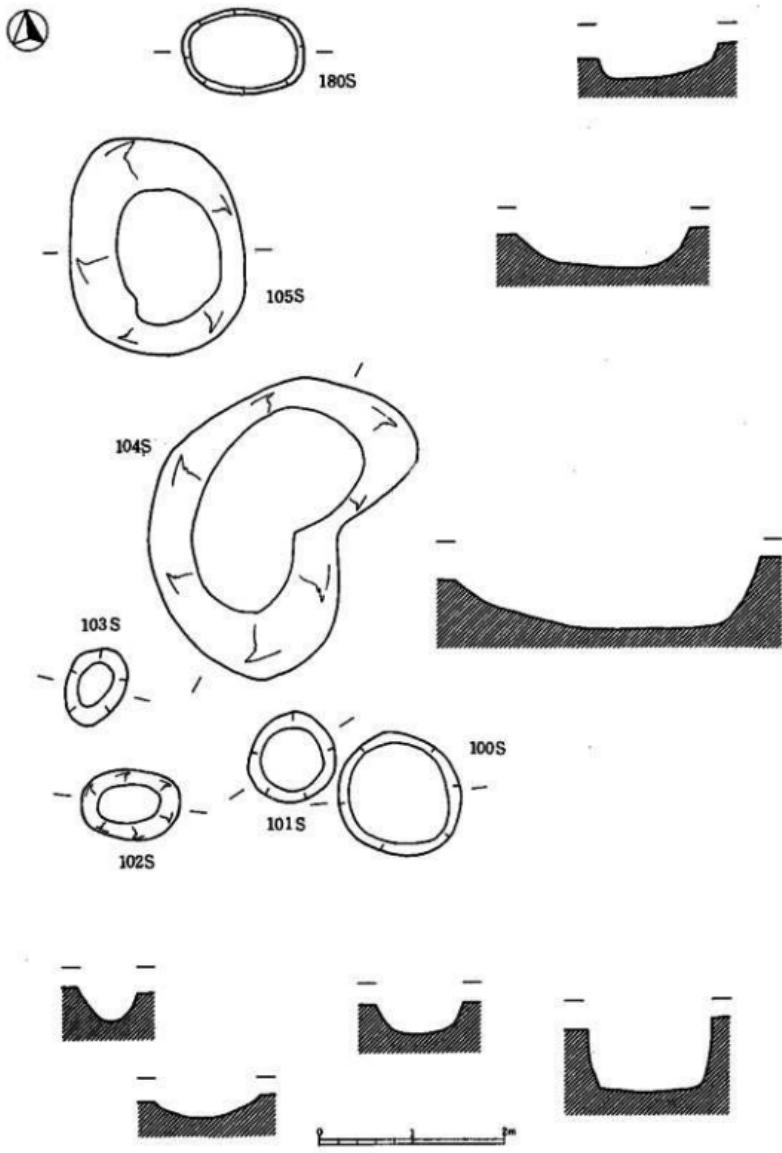
I : 黒色土
II : 暗褐色土



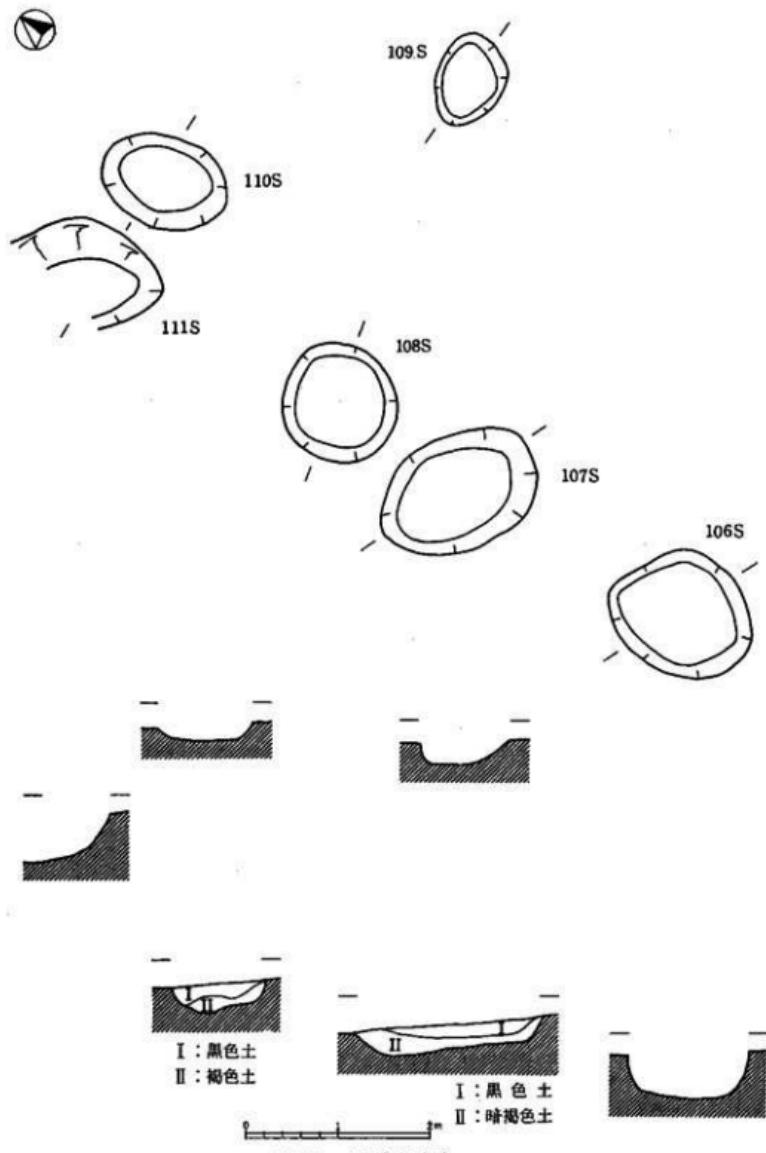
第20図 小豊穴群 (14)



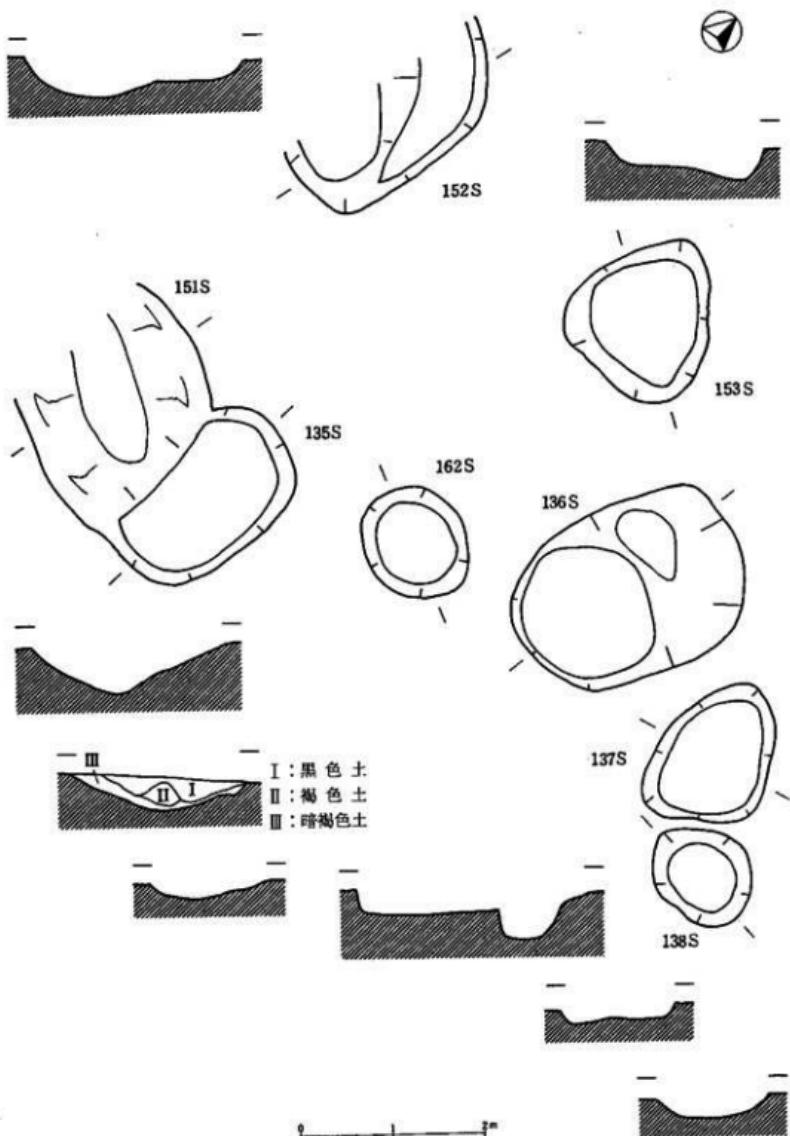
第21図 小孔穴群 (15)



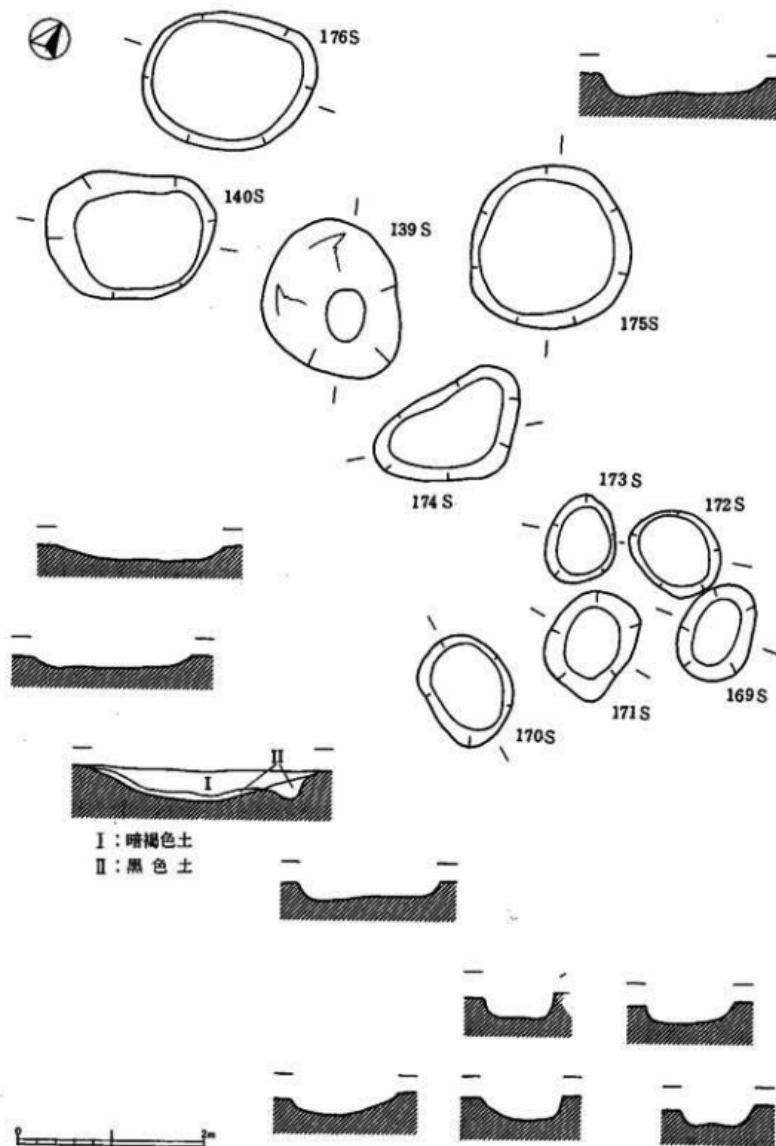
第22図 小整穴群 (16)



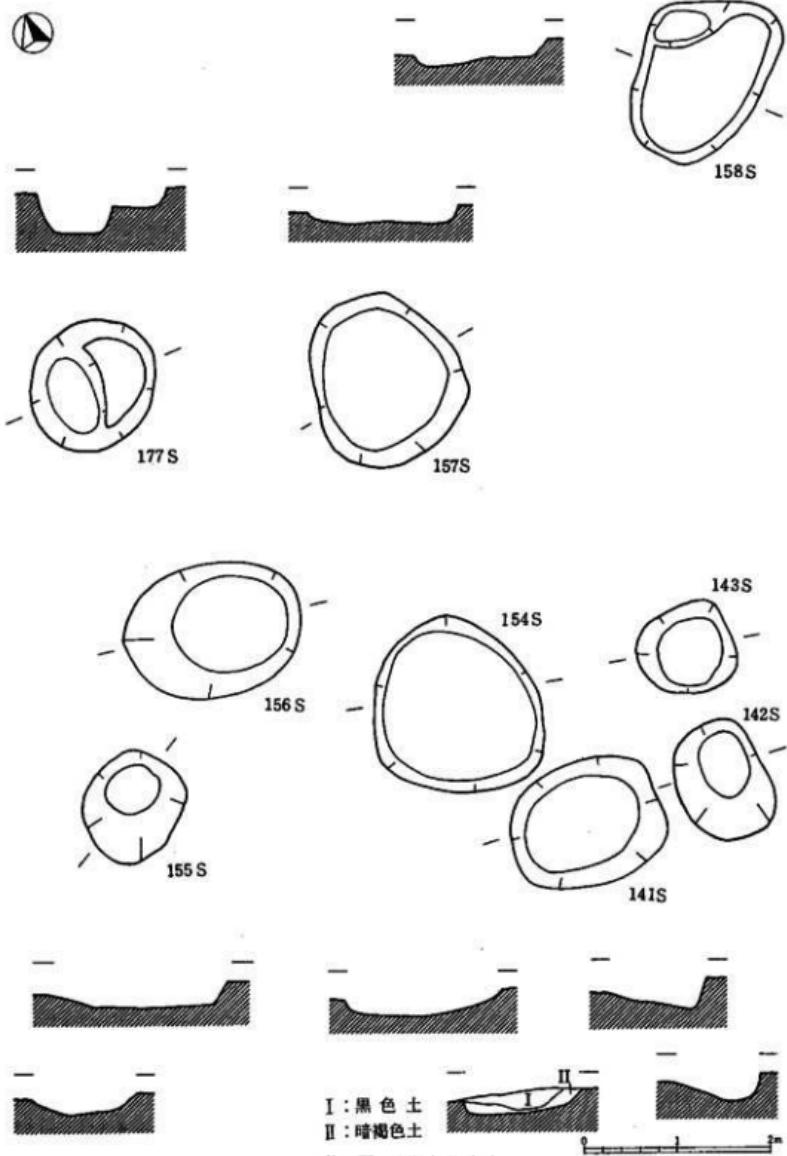
第23図 小型穴群 (17)



第24図 小豊穴群 (18)



第25図 小竪穴群 (19)



第26図 小豊穴群 (20)

第V章 遺 物

(1) 住居址

第1号・第5号住居址

遺構の項でも説明したように1号・5号の住居址は重複して発見され、1号住居の床面上に5号住居の床面が貼られていたことから1号・5号の新旧関係が把えられている。ここから出土した土器にも28図1～12に示す諸磯○に比定されるものと、27図1・2、28図16・17、29図1～5のこれより新しい前期末のものとの新旧が認められる。しかし、出土状態は混在しており、厳密には帰属する住居を特定できない。

28図1～6は条線を地文とし、結節状浮線文・ボタン状貼付文を施す。7～12は条線地文にボタン状貼付文を有す。14・15は繩文を施し、14の胴上部には横位沈線がめぐる。16・17・29図1～3は平行条線文を施したもの。4・5は連続結節条線文を施したものである。27図1は、口径27cmの深鉢形で、口縁に刻みをもつ隆帯を一条めぐらし、その下位に沈線による渦文・三角陰刻文を配し、胴部に綾衫状の条線を施している。

石器は、42図12～14の3点がある。12は背部が山形をなす横刃型石器、13は全形が橢円状を呈する横刃型石器、14は小型の石斧である。

第2号住居址

諸磯○式から前期末の土器が出土している。30図1～10は、結節状浮線文・ボタン状貼付文を施し、12～31図9は平行条線文を施す。15～19は、三角陰刻文と連続結節条沈線文による三角・円の幾何学文様を配したものである。20・21は、三角陰刻文と平行条線との組み合わせである。22は、薄手で堅い焼きの関西系土器である。23は無文の浅鉢で繩文晩期に属するものかもしれない。

石器では、42図1・2の石錐、3のスクレイバー、4のビエス・エスキュー16の打製石斧、15・17～21の横刃型石器があり、横刃型石器の多出は注目される。

第3号住居址

3号址は4号住居址と重複し、しかも掘り込みが極めて浅い住居であったため、出土遺物は極めて僅少であった。29図7～9に示した平行条線文土器片が得られたのみである。

第4号住居址

4号址も3号址同様、掘り込みが浅く、遺物の出土は少ない。29図10～12は、綾衫状の平行条線文を施したもの。13・14は、薄手で堅い焼きの繩文を主とする関西系土器。15・16は連続結

節状沈線文土器。前期末に位置づけられよう。

(2) 小豎穴

184 基発見された小豎穴からは、32図～41図に示す縄文前期末を主体とする遺物が出土した。4軒発見された住居と同時期であり、住居に付随するものとしてよいであろう。ただ、唯一、縄文晩期の浅鉢形土器（27図9）を出土した69号は時期的に異なっている。

1号（32図）1は麓切浮線文と、2・3は沈線地文にボタン状貼付文を付し、5・6は沈線のみの文様を施す。2号7は結節状浮線文、8は沈線文施文土器。3号（27図）3は、底径14cm、無文の土器底部、32図9は麓切浮線文とボタン状貼付文を、10・11は弧を描く沈線文を施す。石器として42図5の石鎌が1点得られている。4号12・13は結節状浮線文、14～18と5号・7号・8号の19～34は沈線文により綾杉・弧線・渦巻文等を施す。19・21・26・27は平口縁、20・28～30は波状口縁、18・34および27図4は強く張り出した底部形態を示している。

9号（33図）1・2は弧線・綾杉の沈線文。10号の27図5は口径17.5cm、現存高13cmの平口縁の深鉢形で、口辺部に平行沈線文を横走させ、胴部以下は横位の沈線による弧線により充填されている。11号の33図8・10は結節状沈線文、9は麓切浮線文、12～15は沈線による渦巻・弧線文。12号は比較的多くの土器が出土した小豎穴で、16・17は平口縁で結節状沈線文とボタン状貼付文を19～29は沈線文を施す、30は無文土器である。

13号（34図）1～6、14号7・8は沈線による斜行文・弧線文等を施す。1は平口縁、2は波状口縁。14号からは43図8の横刃型石器が1点出土している。16号9は、薄手で堅い焼きの関西系土器。18号からは、42図6の底辺に掘り込みのある石鎌が1点出土している。20号からは多くの土器片が得られた。15～18は麓切浮線文、19・20は結節状浮線文を施す。22～26は沈線施文。27は、16号9に類似した関西系土器。

21号（35図）2、22号3は麓切沈線施文。4～9は沈線による弧線・斜行文で、8は三角形をモチーフとする。11～13は縄文地文に結節沈線文を配する薄手・堅緻な焼きの関西系土器。26号23は胴部に沈線による縱長の渦巻文を施す。25・26は縄文を施したもので、25の口縁は強く外反する。23号14、25号15～17、28号18～31はともに沈線による文様を施文している。

29号（36図）6は、口径26cm、現存高12.5cmの外方に張り出す胴上半部で、肥厚した口縁に半裁竹管による押引きを施し、胴上部には沈線による弧線文、胴下部には綾杉状文を配している。36図6は縄文地文に結節浮線文を施した関西系土器。32号の10～12は縄文施文土器で、13・14は関西系土器。33号（27図）7は底径7cm、現存高8.3cmの小型土器で、胴・底を張り出させた形態を呈する。胴には沈線による斜行文が無造作に施され、底部には粗く縄文を施文している。薄手で、暗褐色の堅い焼きの土器である。34号（36図）15～18、36号24、38号25は沈線文施文。19・23は三角形陰刻文を配する。39号27・30、40号32はボタン状貼付文・沈線文の組み合せ。39号からは43図9の横刃型石器、40号からは42図7の石鎌が各1点出土している。45号（37

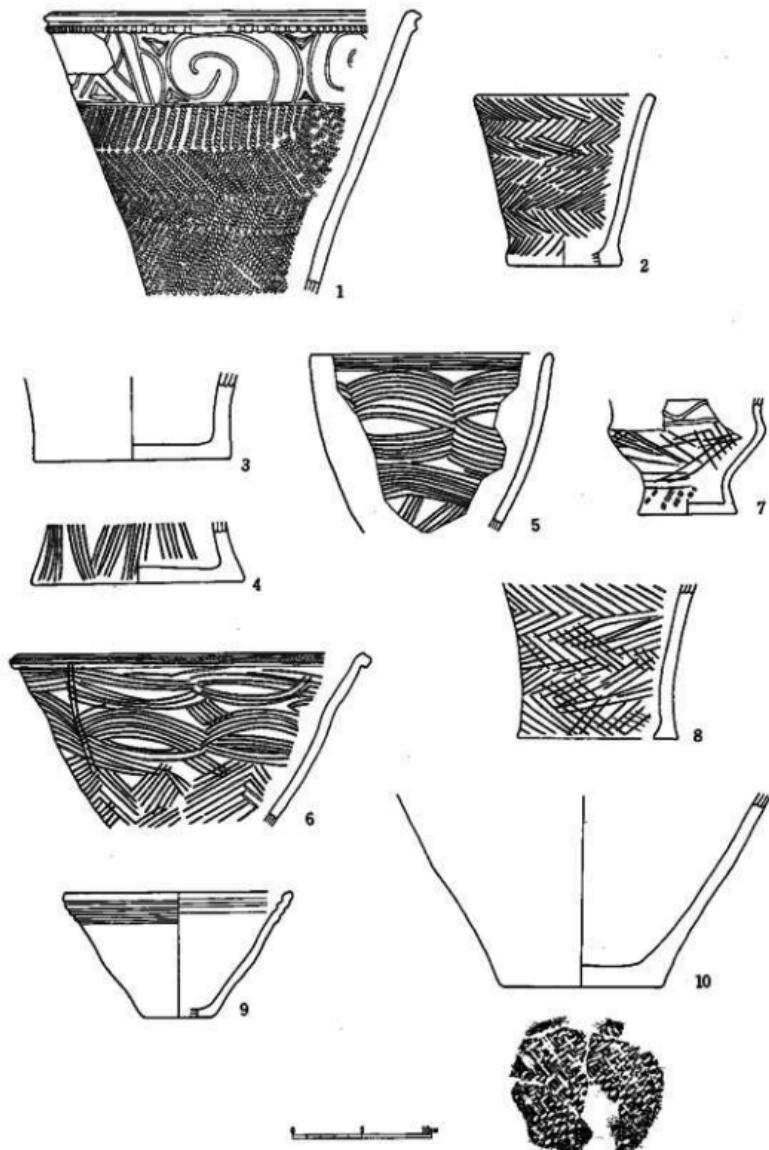
図) 1～3、46号4は沈線による十字文、三角形文等を施文。52号からは、8～25の多くの土器が出土。20・21は口縁部に押圧隆帯文を2～3状貼付したもの。

66号の27図8は、綾杉状に粗く沈線を施したもの。同址には38図1～4のような三角を基調とした文様構成もみられる。68号5・6は薄手・堅敏な焼き。69号からは27図9の縄文晩期と考えられる口径16.5cm、器高9cmの小形浅鉢形土器が出土している。他に38図8・9の前期土器片も少量得られている。70号10・11、71号12・13、73号15～20、75号23～27・29・30は綾杉状の沈線を主に、一部にボタン状貼付文を有する。16・17は平口縁、15・25は波状口縁。他に14・21・22・31・32の結節状浮線文施文土器もわずか存する。このほかに70号から13の打製石斧が1点づつ出土している。

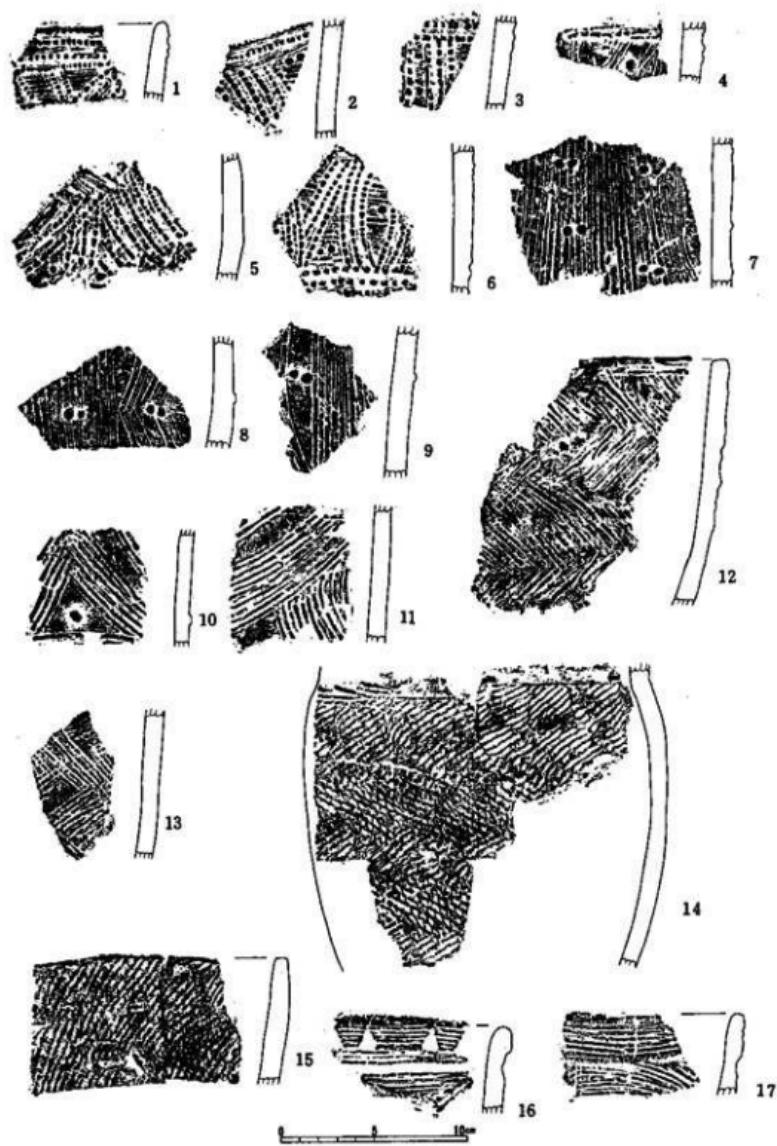
79号(39図)1は平口縁の結節浮線文土器。2は箇切浮線文。81号5は、押圧隆帯文施文の平口縁片。87号10は大きな波状口縁部で、沈線による弧線文が描かれている。90・91号の13・14・99の18・19は条線を地文に結節浮線文、ボタン状貼付文を配する。99号21～23、100号24・26～38は沈線による弧線・溝巻・十字文を施している。24は平口縁に山形の突起を付す。

104号(40図)1～3は縦の粗らな綾杉文を施文。105号4は縄文を地文に、押圧隆帯を三条めぐらしている。118号の12～15は結節状沈線文を弧状・円状に密接施文している。器形は大きな波状口縁を呈する。119号～122号・125号～127号・129号・149号出土土器はともに沈線文を施文する。27図10は122号出土の胴下半部の無文土器。底径11.3cm、底面には縄代痕がある。このほか、124号から43図10の横刃型石器、14の打製石斧、126号から15の打製石斧が出土している。

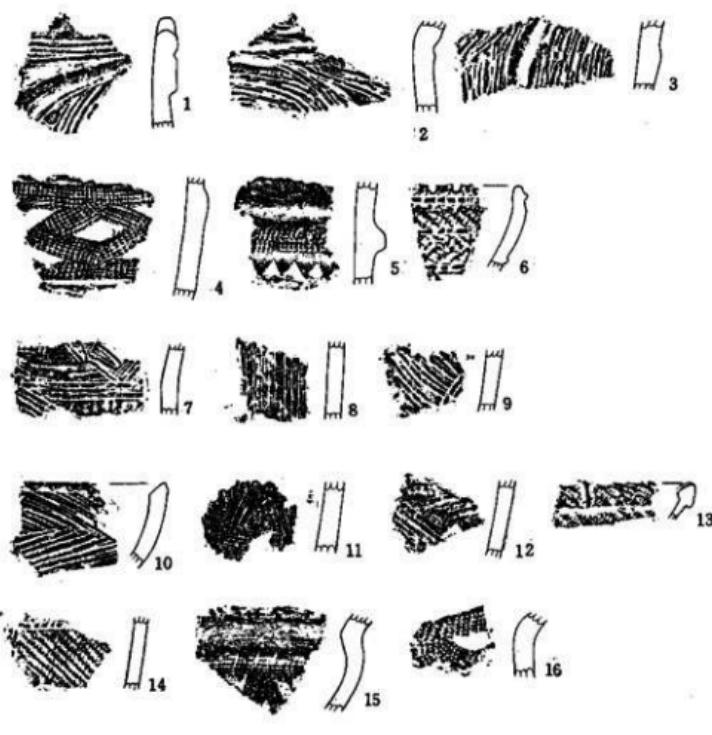
132号(41図)2は、縄文を地文に口縁に2条押圧隆帯文をめぐらす。135号・139号・149号の4～13は、ともに沈線による溝巻・弧・綾杉文等を施文。167号16は、三角陰刻文を、179号27は弧線文を粗く、胴上半は横に、下半は縦に施文する。



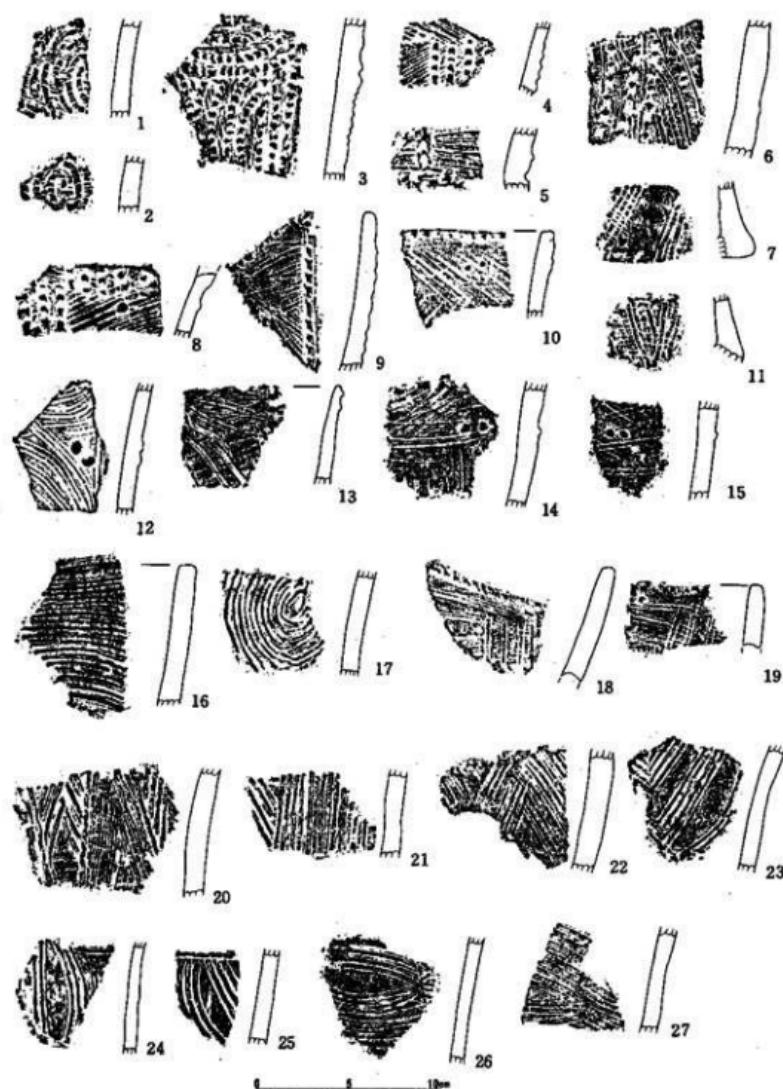
第27図 出土土器 (1・2 1号性、3 3号小竪穴、4 8号小竪穴、5 10号小竪穴、
6 29号小竪穴、7 33号小竪穴、8 66号小竪穴、9 69号小竪穴、
10 122号小竪穴)



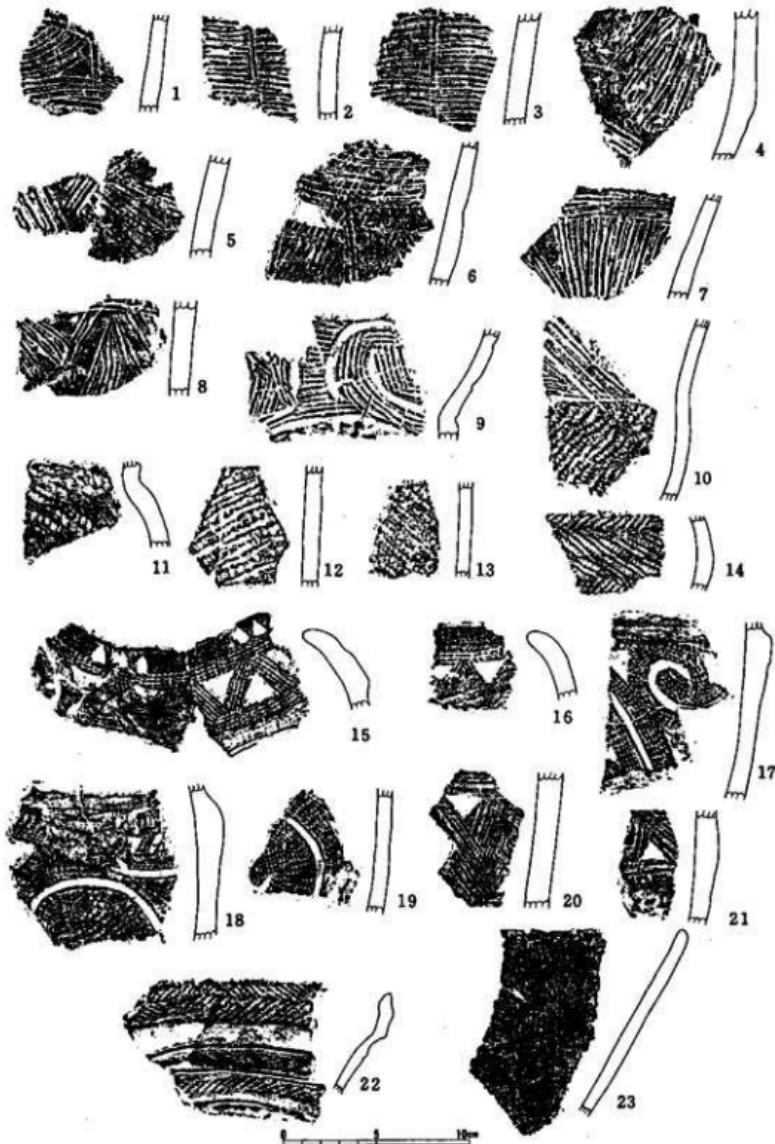
第28圖 1号・5号住居址出土土器



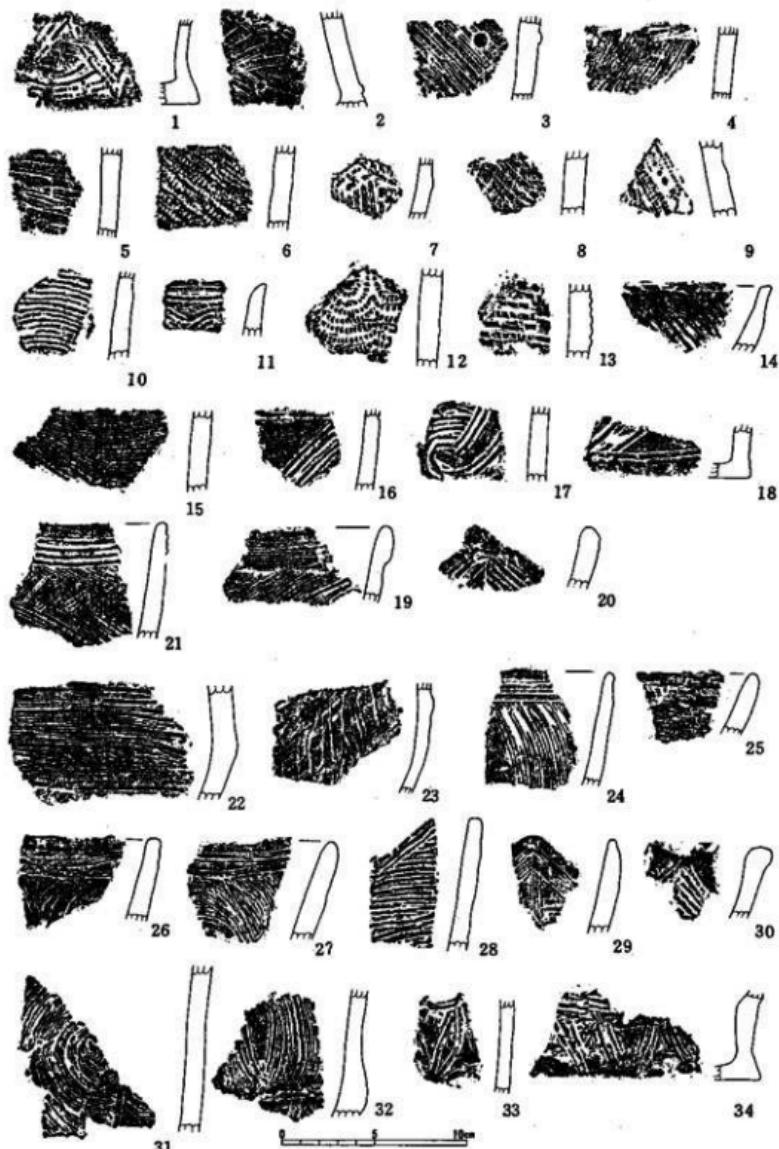
第29図 住居址出土土器 (1号1~6、3号7~9、4号10~16)



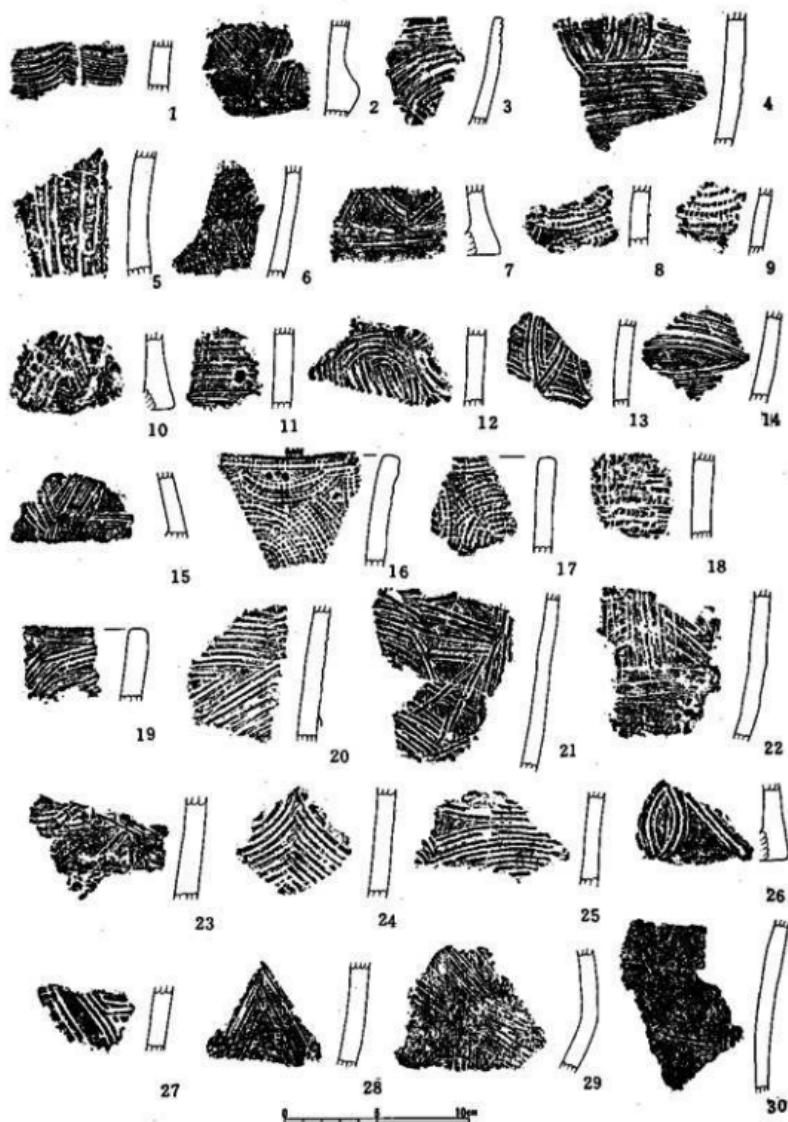
第30図 2号住居址出土土器



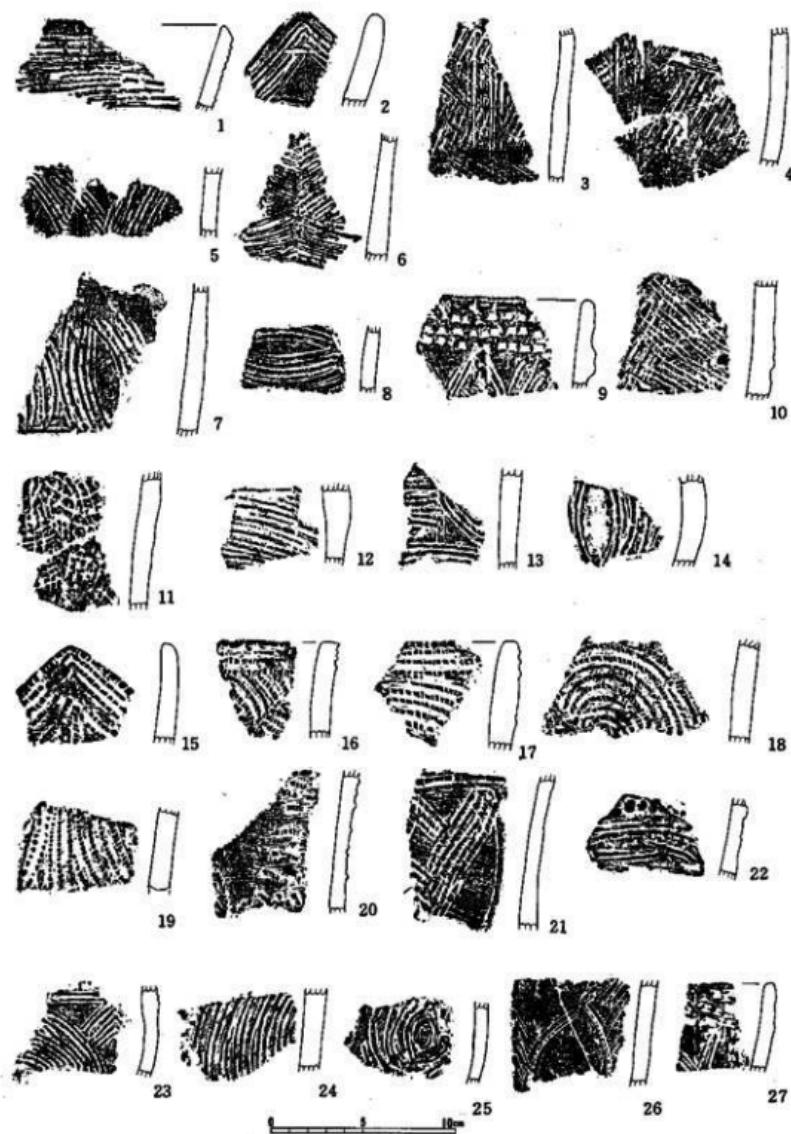
第31図 2号住居址出土土器



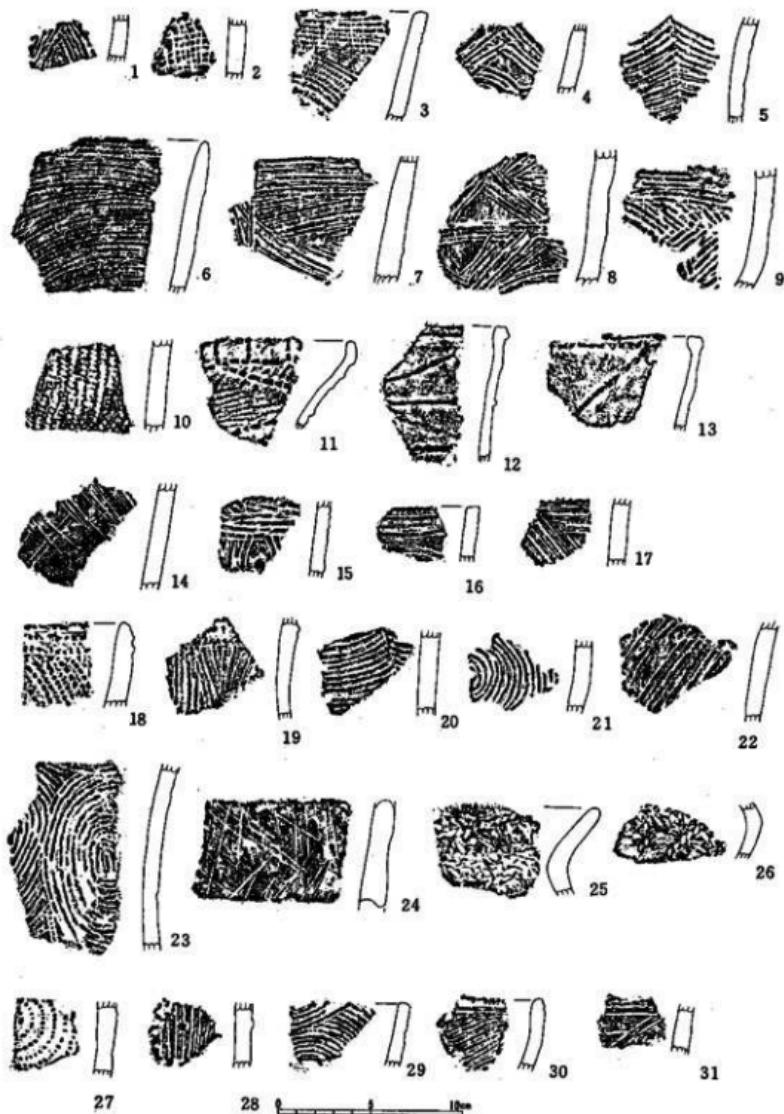
第32図 小堅穴出土土器 (1) (1号1~6、2号7・8、3号9~11、4号12~18、5号19・20、
7号21~25、8号26~34)



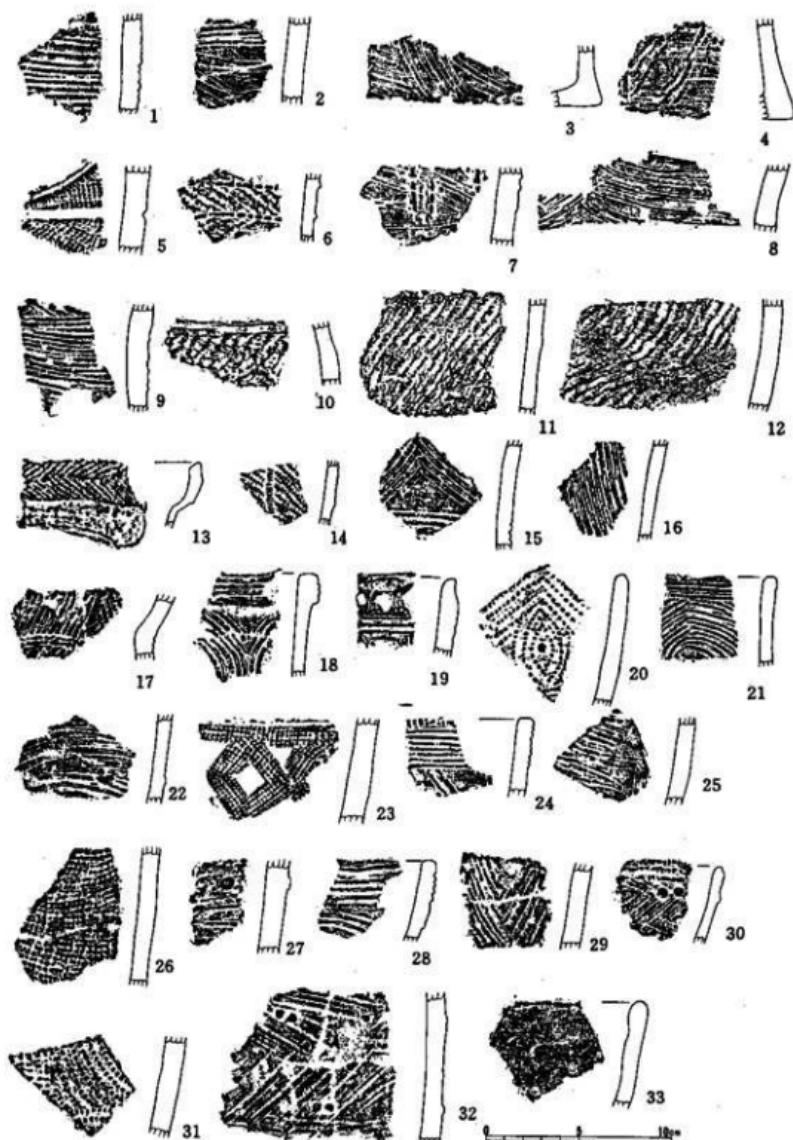
第33図 小豊穴出土土器 (9号1・2、10号3~7、11号8~15、12号16~30)



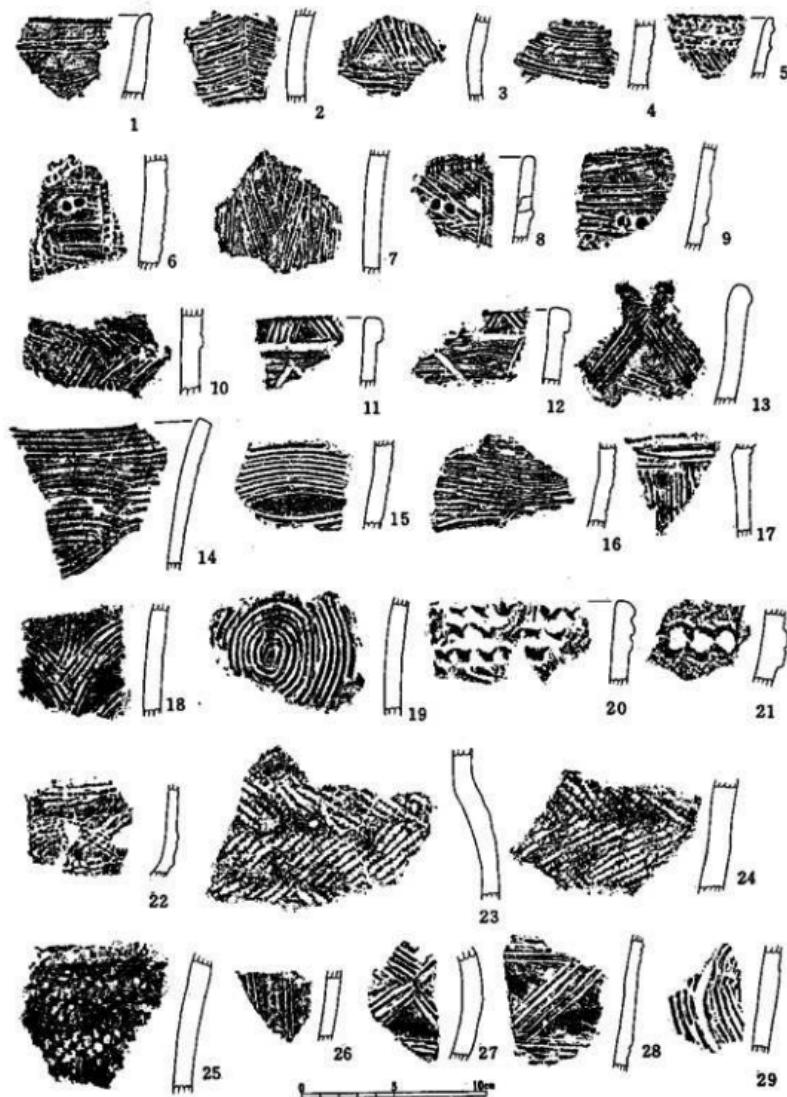
第34図 小竪穴出土土器 (13号1~6、14号7・8、16号9・10、19号11~14、20号15~27)



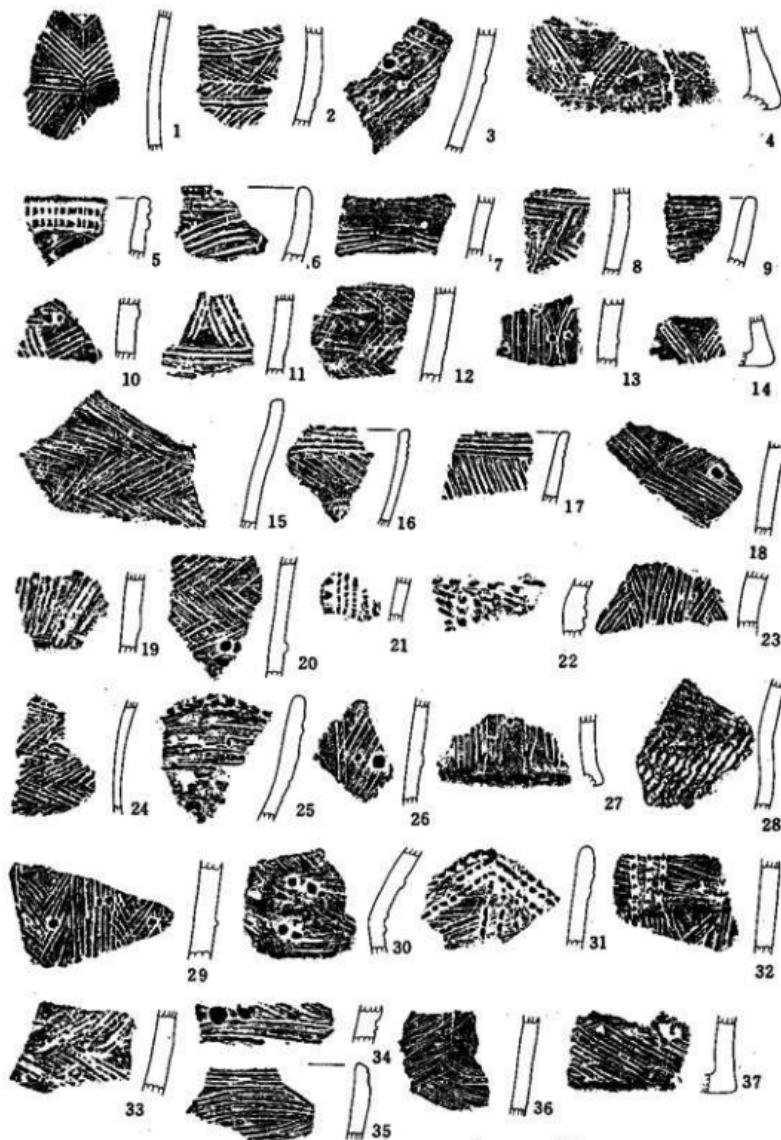
第35図 小整穴出土土器 (21号1・2、22号3~13、23号14、25号15~17、26号18~26、
28号27~31)



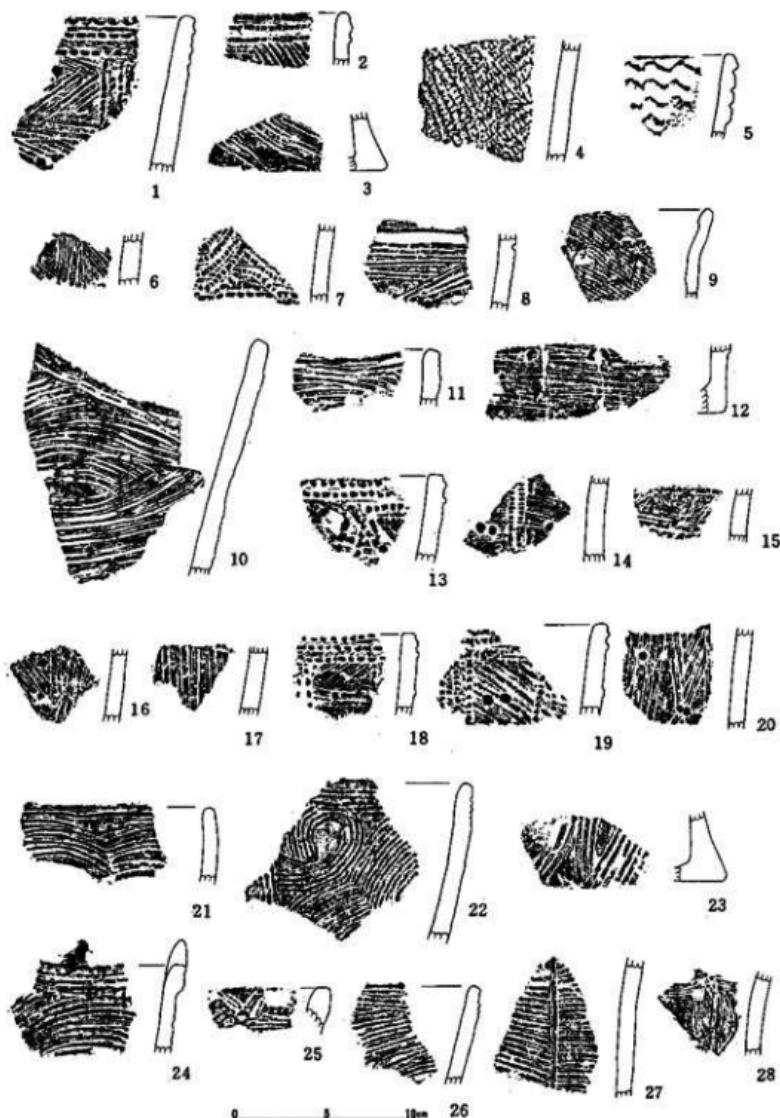
第36图 小砾穴出土土器 (29号1~6、32号7~14、34号15~18、35号19、36号20~23、
37号24、38号25、39号26~30、40号31~33)



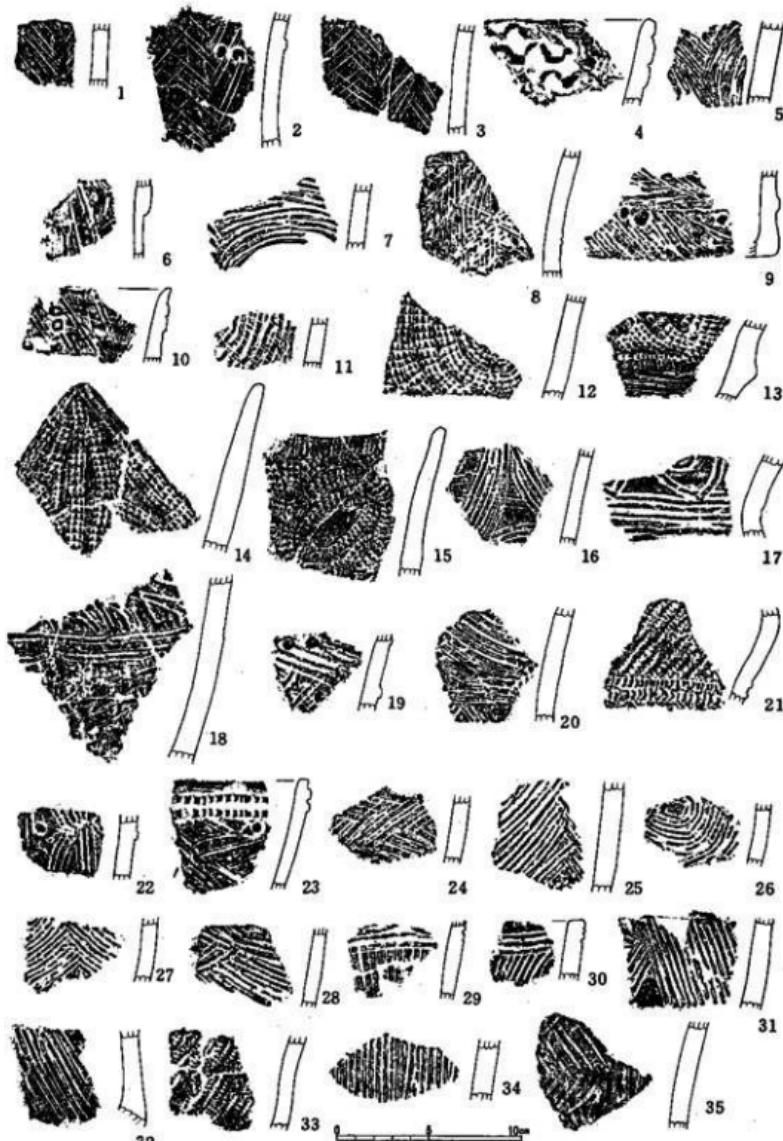
第37图 小型穴出土器 (45号1~3、46号4、49号5~7、52号8~25、59号26、64号27~29)



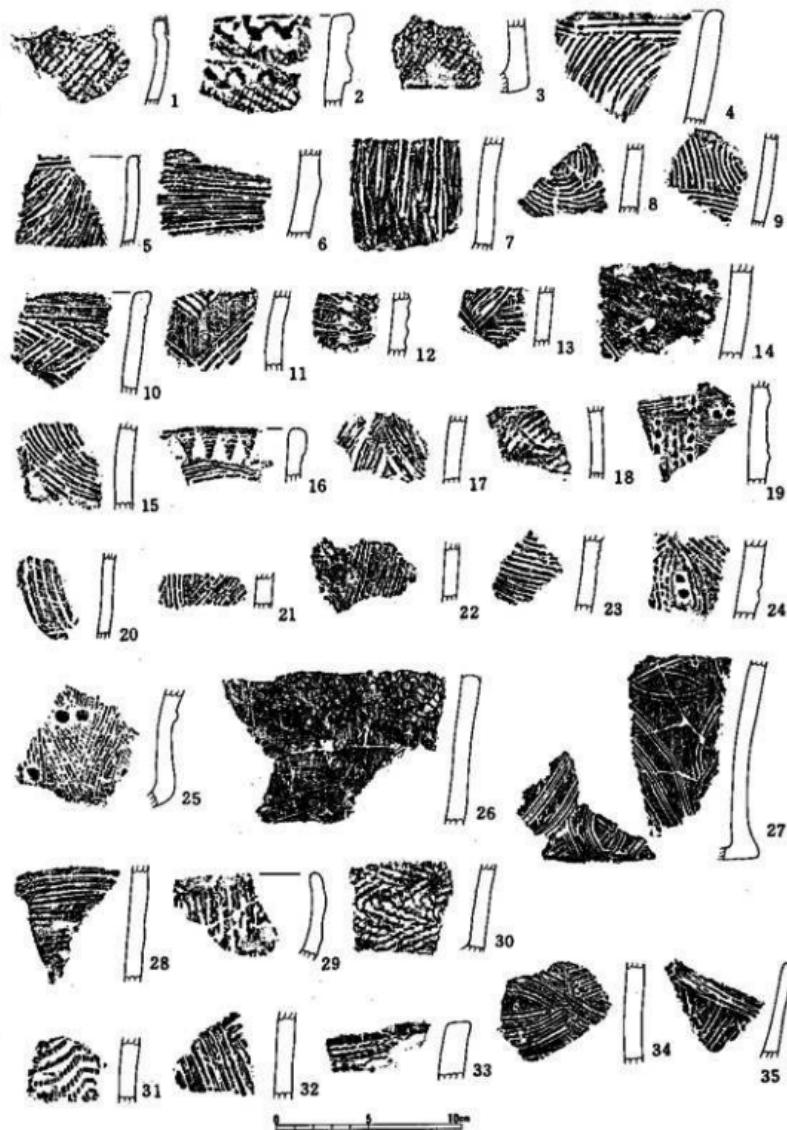
第38図 小型穴出土土器 (66号1~4、68号5~7、69号8・9、70号10・11、71号12~14、
73号15~21、75号22~31、77号32~37)



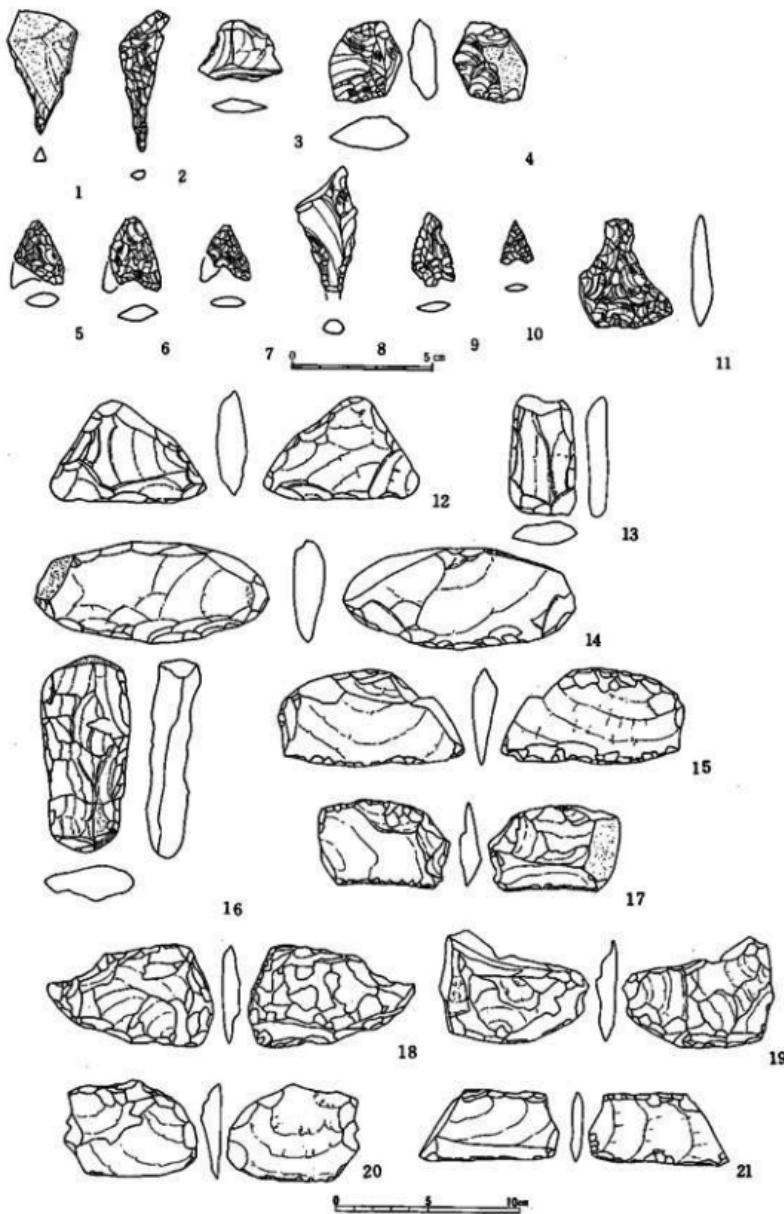
第39圖 小窯穴出土土器 (79号1~3、81号4·5、83号6、84号7·8、85号9、87号10~12、
90号13、91号14·15、92号16·17、99号18~23、100号24~28)



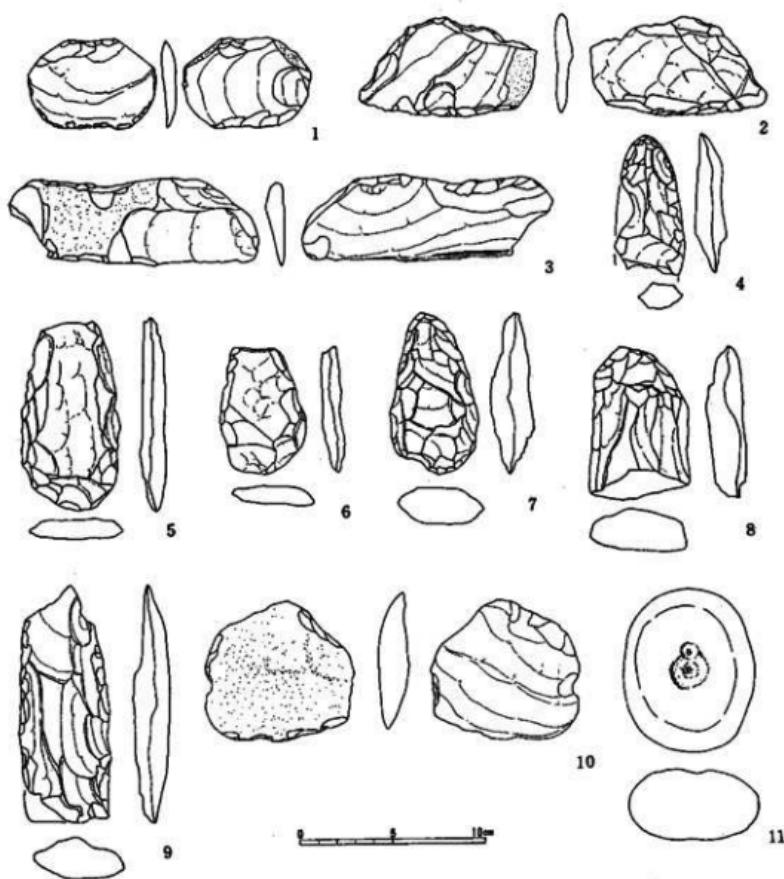
第40図 小型穴出土土器 (104号1~3、105号4~5、108号6、110号8~9、115号10~11、
118号12~17、119号18~21、120号22~23、121号24、122号25~26、
125号27~29、126号30~33、127号34、129号35、149号7)



第41図 小豊穴出土土器 (130号1、131号2、132号3、135号4、139号5~9、149号10~13、
150号14、158号15、167号16~20、179号21~23、178号24~25、179号26~35)



第42圖 出土石器 (1号住12~14、2号住1~4·15~21、3号小砾穴5、18号6、40号7、
150号8、D—3区9、C—4区10·11)



第43図 出土石器 (14号小形1、39号2、104号37、20号4、70号5、73号6、126号8、
G—11区9、D—3区10、F—3区11)

第VI章 まとめ

古屋敷遺跡は、塩沢川・小場ヶ沢川にはさまれた西に向かって張り出す台地上に営まれた縄文前期末を中心とする集落址である。

調査された2000 m²の区域からは、前期踏礎C～前期末にかかる5軒の住居址と180基近い小豎穴が発見された。住居址はいずれも南に向かった緩斜面に集中し、小豎穴は調査区域全域にわたって分布している。

5軒検出された住居址中、規模・内容が比較的はっきりしているのは1・2・5号の3軒である。プランはいずれも円形ないし楕円形で、規模は径3～4mのものと5mのものとがある。柱穴は4ないし6本で、1・5号北址は屋外にも柱穴がみられる。炉は1・5号にはなかったが、2号には石を用いた炉が設けられている。

松本平では前期末踏礎C式～十三菩提式に属する住居の調査例に塩尻市女夫山の神2号、五輪堂5・6号、松本市白神場1・5・6・7・8号、山形村唐沢2号、松川村桜沢があり、円形・楕円形プランを主体に、径6～7m、3～4mの大小2系統の規模の存在が確かめられている。

また、柱穴4～5本、炉は地床炉を主に、添石炉が存する。今回の古屋敷での調査結果は、この松本平の他の例に類似した在り方を示し、松本平における前期末の様相をよく示したものといえる。

また、前期末の集落の在り方をよく示しているといわれる白神場遺跡では、南から南東向きの斜面およびその背後の平坦面4500 m²に村が展開し、南斜面に6軒の住居を営み、平坦面を中心に100基近い小豎穴を設ける構成をとっている。こうした南斜面への住居の構築とその北側地区への小豎穴の配列は、古屋敷遺跡でも同様の状態が確認されており、当時の集落の在り方を示す好例となろう。

出土遺物としては、土器類の割合に石器類の出土が少なかったことが指摘できる。この時期に多い石鎌・石匙・石錐・スクレイパー等の剥片石器類の僅少さは注目された。ただし、5cm角程度の黒曜石原石はかなりの量が得られており、また剥片もかなり目立っていることから、単に製品が少ないということかもしれない。

前期末は今まで良好な資料に恵まれなかつたが、本遺跡の調査結果はその空白を埋めるものとなろう。



遺跡遠景(東側から)、遠方は市街地広丘地区



遺跡遠景(南側から)、遠方は松本市中山丘陵

図版 2



発掘前(南東隅から)



重機による表土除去



遺構掘り下げ



遺物取り上げ(第5号住居址)

図版 4



第5号住居址(左)と第1号住居址(右)



第2号住居址

図版 5



第3号住居址(左)と第4号住居址(右)



第100号小竪穴

図版 6



集石炉



調査区全景（北東から）

古屋敷遺跡

一両内田地区県営圃場整備事業
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一

平成2年3月13日 印刷

平成2年3月15日 発行

発行 塩尻市教育委員会

印刷 アルプス印刷株
